

令和 2 (2020)年度

シラバス

- 3 年次 -

科目No.	FCM13-3E, FCM12-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	救急医学		担当教員	岡田 守弘		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	臨床医学、疾病の原因と治療		選択必修	1 単位	前 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学	臨床医学および歯科学				
教員の実務経験と授業内容の関連		大学付属病院救命救急センター及び急性期病院救急科での臨床経験のある教員が、救急疾患の初期対応について講義する。				
授業内容の要約		医療機関では高齢者や基礎疾患をもつ患者と接することが多く、患者が目の前で救急疾患を発症することはまれではない。このため、PT、OT、ST も救急疾患に対する適切な初期対応が求められる。本講座では救急患者に対する初期の観察、ケアを中心に解説する。				
学修目標 到達目標		1.心肺蘇生ができる 2.バイタルサインのチェックと評価ができる 3.救急疾患に対する適切な初期対応ができる				
授業形態 授業の進め方		講義形式で行い、間に質疑応答を行う。 心肺蘇生については実技指導も行う。				
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 救急病態（教科書 p21～53）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
2. 救急疾患（循環器疾患）（教科書 p55～65）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
3. 救急疾患（呼吸器疾患）（教科書 p69～84）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
4. 救急疾患（中枢神経疾患）（教科書 p87～100）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
5. 救急疾患（消化器疾患）（教科書 p103～112）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
6. 救急疾患（代謝疾患・外因性疾患）（教科書 p113-118）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
7. 心肺蘇生法（教科書 p1-18）			復習（板書内容を整理し、ノートにまとめる）			
8. 定期試験						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 80 %	■その他 20 %	
	基準等			定期試験にて授業内容全般についての理解度を評価する。	授業中の質疑応答にて理解度を評価する。遅刻、無断退室、講義中の私語・スマートフォンの使用等は減点の対象とする。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	渡邊隆夫ら	メディカルスタッフのための救急医学		医学出版社		2007
参考文献	特に指定しない					
履修要件等		一般臨床医学、内科学、臨床神経学を履修しておくことが望ましい。				
研究室	1 号館 5 階 第 15 研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 10:40～12:10		

科目No.	FSW04-3E, FSL04-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	社会福祉援助技術論 (含ケースワーク論)		担当教員	野村 和樹		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	社会福祉とリハビリの理念		選択必修	1 単位	前 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と 授業内容の関連		児童養護施設 指導員 (嘱託) 事例検討と面接において実際の臨床場면을題材に用いて教える				
授業内容の要約		本講義は、“対人支援”に関わる講義である。したがって、講義に用いる事例は、登場人物の人生と切り離して考えられるものではない。単に知識の習得に止まらず、共感と理解を目指すものとしたい。まずは基本となるところの面接のあり方を理論的に明らかにする。社会福祉援助活動の意義・形態・方法を通して、ソーシャルワーク実践のために必要な知識と方法論を教授する。				
学修目標 到達目標		1. ケースワークに関わる理論について説明でき、それぞれの方法や活動の目的や役割を理解できる 2. 社会福祉の専門的援助について理解を深め、展開場面ごとに意義と方法について説明できる 3. 対人支援の臨床現場において、ラポールの形成等援助技術を活用できる				
授業形態 授業の進め方		基本的な知識を講義した上で、事例を基にグループディスカッションやロールプレイを行い、その結果をプレゼンテーションする。教科書は用いずレジュメを配布し授業を進めるので、A4 版のファイルを用意すること				
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 社会福祉援助技術の体系				社会福祉援助技術の体系をまとめること		
2. ソーシャルワークの展開過程				ソーシャルワークの過程をまとめること		
3. ソーシャルワーカーとは イギリスのソーシャルワーカー				ソーシャルワーカーについての意見をまとめること		
4. 面接技法Ⅰ (初回面接、ラポールの形成)				ラポールの形成についてまとめること		
5. 面接技法Ⅱ (面接に関わる理論と技法)				面接に関わる理論をまとめること		
6. 援助技術の実践Ⅰ 事例検討と面接				事例検討とロールプレイについての意見をまとめること		
7. 援助技術の実践Ⅱ 事例検討と面接のプレゼンテーション				他のグループの評価を行うこと		
定 期 試 験 (期 末 レ ポ ー ト)						
8. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題 10%	□レポート %	■定期試験 70%	■その他 20%	
	基準等	事例検討		社会福祉援助技術の知識を問う		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	各項目に応じてレジュメを配布する。					
参考文献	講義内で適宜紹介する。					
履修要件等	社会学, 「社会福祉学」, 「社会保障制度」を履修されていることが望ましい。					
研究室	1 号館 4 階第 1 研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 12:00～13:00		

科目No.	FSW05-3E, FSL05-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	医用福祉機器論		担当教員	古井 透 ・ 金井 謙介		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	社会福祉とリハビリの理念		選択必修	1 単位	前 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と授業内容の関連	担当教員はともに、長年、日本リハビリテーション工学協会での社会啓発や学術活動で協働してきた実務経験を持つ。療法士として現場で生活支援に関わる際に必要な福祉機器の知識と技術を熟知し、とりわけ金井は感覚障害や建築分野、古井は姿勢保持・移動機器分野を専門としている。					
授業内容の要約	療法士として現場で生活支援に関わる際に必要な福祉機器の知識と技術を学ぶ。福祉機器を媒介にしたリハビリテーション支援の考え方を知り、具体的体験を通じて視覚・聴覚などの感覚障害に対する機器的対策・移動支援機器について学び、機器を使う際のメリットとリスクについても考える。					
学修目標 到達目標	1. 機器導入に必要な知識や基本概念を体系的に語ることができる 2. 特殊な機器の特徴や用途について体験を通じて理解できる 3. 福祉機器に関する理論と介入法を身につけることができる					
授業形態 授業の進め方	教科書は指定せずレジメの配布を行うが、スライドにより視覚的にわかりやすい講義を行う。講義中も双方向性の「考える」授業を心がけ、全体の配分も体験実習や実技を豊富に取り入れた「感じる」授業を中心とし、問題発見・解決能力の育成をはかるので、積極的態度で臨んで欲しい。					
授業計画					授業時間外に必要な学修	30 分以上
1. 福祉機器を用いたリハ支援の考え方 (Assistive Technology の概念とセラピストの役割)					各自自分のお気に入りの道具を持参する	
2. 座位の解剖学・生理学および座圧計測・座位姿勢計測の理論と実際					動きやすい服装で参加	
3. バリアフリー展での AAC・視聴覚支援機器・移動支援機器の調査または座位姿勢計測実習					4 月 21 日土曜日)※ 課題用紙に記入して提出	
4. 福祉機器・住環境のリスクマネジメント:ヒヤリハット・家庭内事故とその対策 (金井)					レジメから要点をまとめる	
5. 車いすの構造の理解と適合：座学と演習 (金井)					レジメから要点をまとめる	
6. 歩行補助具の理解と適合：座学と演習 (金井)					レジメから要点をまとめる	
7. 視覚障害・聴覚障害の支援機器・技術の理解：座学と演習 (金井)					レジメから要点をまとめる	
定期試験 (期 末 レ ポ ー ト)						
8. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説) Visitability と ADAPT (古井)						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	■レポート 100+		□定期試験	□その他
	基準等	4 月の AAC・視聴覚支援機器・移動支援機器の調査または座位姿勢計測実習の結果を中間レポート、7 回までの内容から設定した課題についての期末レポートを合わせて評価する				
参考文献	著者		タイトル		出版社	発行年
	日本生活支援工学会編		「生活支援工学概論」		コロナ社	2013
	R.Cooper, .H.Onabe, D.Hobson		An Introduction to Rehabilitation Engineering		Taylor&Francis	2006
	廣瀬 秀行・木之瀬 隆		高齢者のシーティング 第2 版		三輪書店	2014
	小川喜道・杉野昭博		よくわかる障害学		ミネルヴァ書房	2014
履修要件等	福祉機器や医用機器に関心のあるもの					
研究室	1 号館 5 階 第 20 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 11:40～12:40		

科目No.	FSW03-3E, FSL03-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	関連職種連携論 (チームワーク論)		担当教員	野村 和樹		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	社会福祉とリハビリの理念		選択必修	1 単位	前 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と 授業内容の関連						
授業内容の要約		2025 年を目処にますます地域包括ケアシステムの充実が求められる。それに伴い医療・保健・福祉等の専門職には、専門知識や理論、技能を身につけるだけで留まらず、他職種と連携する中で高度な専門性を発揮し、それぞれの職種に応じた専門性を活用できるマネジメント能力が求められている。そのためには、専門職の役割を知り、連携の意義と方法を理解し、他者を支援するにあたっての連携のあり、課題のとらえ方を理解する必要がある。				
学修目標 到達目標		1. 専門職を定義できる 2. 職業人として人との関わりにおける自身の立ち位置ならびになすべき役割について考えられる 3. 専門職としてサービス利用者の最善の利益の尊重を他の専門職とともにチームとして考えることができる				
授業形態 授業の進め方		講義形式で授業を進めるが、テーマを与えてグループでのディスカッション。その結果をまとめプレゼンテーションを行う。レジュメを配布するので、A4 版のファイルを用意すること。コール教室を使用し、課題の作成をおこなうことがある。				
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 専門職とは			それぞれの専門職についてまとめること			
2. リハビリテーションと医療福祉Ⅰ 他職種の理解			他職種についてまとめること			
3. リハビリテーションと医療福祉Ⅱ 職種の役割の理解			多職種の専門領域をまとめる			
4. チームケアⅠ ディスカッション			チームケアにおける志望職種の役割をまとめ			
5. チームケアⅡ プレゼンテーション			プレゼンテーションの感想を記すこと			
6. 地域包括ケアシステムⅠ 地域包括ケアシステムの理解			地域包括ケアシステムについてまとめること			
7. 地域包括ケアシステムⅡ 地域包括ケアシステムの担い手			地域包括ケアシステムにおける自らの役割をまとめること			
定 期 試 験 (期 末 レ ポ ー ト)						
8. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題 10%	□レポート %	■定期試験 70%	■その他 20%	
	基準等	講義内で課題を課す		全般に渡り理解度をはかる。	プレゼンテーション	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	各項目に応じてレジュメを配布する					
参考文献	講義内で適宜紹介する					
履修要件等	社会福祉学, 社会保障制度, リハビリテーション概論を履修されていることが望ましい					
研究室	1 号館 4 階第 1 研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 12:00～13:00		

科目No.	FSW06-3E, FSL06-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	障害者福祉論		担当教員	野村 和樹		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	社会福祉とリハビリの理念		選択必修	1 単位	前 期 (30h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と授業内容の関連						
授業内容の要約		障がい者の生活実態・障がい者福祉の歴史・障害の概念といった障がい者福祉の概要を解説する。また、近年「障害者の権利に関わる条約」を批准したことに伴い、法令をはじめ通達、制度等は大幅に転換した。それをふまえ障がい児・者に関わる様々な法制度、支援の仕組み・実践の現状と課題について講義する。				
学修目標 到達目標		1. 障害の概念・障害の特性・障がい者の生活実態が把握できる 2. 障がい児・者に関する法制度の知識を習得し、支援について理解できる 3. 障害のある人たちの人権と尊厳を尊重する支援のあり方を療法士として模索する姿勢が習得できる				
授業形態 授業の進め方		原則としては講義形式で行うが、療法士としての支援のあり方を模索できるよう、グループディスカッションやプレゼンテーションの時間を設ける。従って、傍観者的に授業を受ける態度ではなく、自ら思考され表現されることを望む。				
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 障害の理解Ⅰ 発達障害 1 視聴覚教材を題材にディスカッション、プレゼンテーション				他のグループの評価をすること		
2. 障害の理解Ⅱ 精神障害 1 視聴覚教材を題材にディスカッション				精神障害についてまとめること		
3. 精神障害 2 プレゼンテーション				他のグループの評価をすること		
4. 障害の理解Ⅲ 身体障害 1 視聴覚教材を題材にディスカッション、プレゼンテーション				他のグループの評価をすること		
5. ノーマライゼーションと自立生活運動				ノーマライゼーションについてまとめること		
6. 障がい者に関わる法体系と障害の理解Ⅰ (身体障害者福祉法、知的障害者福祉法)				各法についてまとめること		
7. 障がい者に関わる法体系と障害の理解Ⅱ (精神障害者福祉法、発達障害者支援法)				各法についてまとめること		
8. 障害者の権利に関わる条約Ⅰ (障害者の権利に関わる条約の成立から日本の批准まで)				障害者の権利に関わる条約の成立から日本の批准までをまとめること		
9. 障害者の権利に関わる条約Ⅱ (障害者の権利に関わる条約の理解と実施の現状)				障害者の権利に関わる条約についてまとめること		
10. 障がい者施策に関わる法体系Ⅰ (障害者基本法、)				障害者基本法の理念をまとめること		
11. 障がい者施策に関わる法体系Ⅱ (障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律、虐待防止法)				合理的配慮についてまとめること		
12. 障害者総合支援法Ⅰ (障害者総合支援法成立までのあゆみ)				支援費制度からの成立過程をまとめること		
13. 障害者総合支援法Ⅱ (障害者総合支援法の内容と理解)				内容についてまとめること		
14. 障害者手帳				障害者手帳についてまとめること		
定期試験 (期 末 レ ポ ー ト)						
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題	20%	□レポート	%	■定期試験 70% ■その他 10%

	基準等	講義内課題		全般に渡り理解度をはかる。	プレゼンテーション
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	各項目に応じてレジュメを配布する				
参考文献	講義内で適宜紹介する				
履修要件等	社会福祉学，社会保障制度 を履修されていることを望む				
研究室	1 号館 4 階第 1 研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 12:00～13:00	

科目No.	SGR02-3R		授業形態	演習	開講年次	3・4年次
授業科目名	卒業研究		担当教員	中村 美砂 / 卒業研究担当教員		
基本項目	専攻	科目区分		単位数		履修期間
	理学療法学	卒業研究		必修	3 単位	3 年後期
	作業療法学					4 年前期
	言語聴覚学					(90h)
教員の実務経験と授業内容の関連						
授業内容の要約		これまでに学んだ知識を集大成し、一つの研究テーマに取り組む。「自分で問題を発見し、その解決法を見だし、問題を解決する」ためのスキルや方法について、本科目を通じて学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法を修得する。				
学修目標 到達目標		1. 研究テーマを論理的・多面的に理解することができる 2. 問題解決のプランに従い、計画的に研究を遂行することができる 3. 研究内容を口頭発表することができる				
授業形態 授業の進め方		興味のあるテーマについて、関連論文抄読会の準備を行い、ゼミ形式で検討を加え、研究倫理についても学びながら、研究計画を立案・実施していく。多くは実験を伴うテーマであり、結果の整理、統計的評価、研究のまとめを通して学会発表レベルに仕上げることを目標とする。				
授業計画				授業時間外に必要な学修		600 分以上
研究のスケジュールは、研究テーマによって異なり、かつ、研究の進展にあわせ動的に見直しされることになる。下記に授業計画のモデルケースを示す。 1. 文献調査 最新の研究動向を文献などにより調査し、研究上の問題点などを洗い出す 2. 研究方針の決定 研究遂行のための研究方針を議論し決定する 3. 研究計画・方法の決定 問題を解決するための方法・方式を議論し決定する 4. 研究倫理申請書の作成・提出 研究倫理の基本的概念を理解して、倫理委員会への申請書類を作成、提出し審査を受ける 5. 実践 問題を解決するための調査、実験を行う。担当教員と議論しつつ進める 6. 結果・考察 調査、実験により得られた結果をもとに図表などにまとめ、客観的に評価・考察する 7. 卒業研究の発表 研究内容をスライドにまとめ、発表する				これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
成績評価方法	項目	■研究態度 50%	■卒業研究 25%	■研究発表 25%	□その他 %	
	基準等	主査1名（指導教員）が、研究態度の評価を行う。	主査1名および副査2名の計3名が、卒業研究の内容についての評価を行う。	主査1名および副査2名の計3名が、研究発表の評価を行う。		

教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	指導教員による紹介			
	文献検索等により必用な文献を得る			
参考文献				
履修要件等				
研究室	各指導教員 研究室	オフィスアワー	各指導教員	オフィスアワー

科目No.	SRP09-3E, SRO04-3E, SRM02-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	セルフケア論		担当教員	寺山 久美子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	前 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と 授業内容の関連	担当教員は、障害児の機能訓練担当の看護師としての6年間の実務経験、また病院・リハセンターでのOTとしての17年間の実務経験があり、この経験を基に「セルフケア支援」講義を行う					
授業内容の要約	「セルフケア」といえばリハでは「ADL」を指すことが多いが、この言葉は医療・看護・介護や一般の生活でも頻繁に使われる「意味の広い、深い」ことばである。本論では広く、ケア、セルフケアの意味、セルフケアの低下・障害と獲得・自立への方策、セルフケア支援の法制度等を概観し、セルフケア獲得・支援の実際を理解、チームアプローチの中でのリハ職の役割を探る					
学修目標 到達目標	1. ケア、セルフケアの基本概念を自らのセルフケア発達過程や経験に照らして説明できる 2. セルフケアの低下・障害と獲得のための支援のあり方や方法を入院中の患者・精神科患者、地域生活のメンタルヘルス支援者の事例を通して説明できる 3. 自分自身あるいは事例を通してセルフケア自立の重要性と過程を紹介できる					
授業形態 授業の進め方	講義とグループ討論、課題への取組等を併用する。セルフケアの自立・向上を常に「自分自身の課題でもある」ととらえて、向上をめざして授業に参加することを薦める					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 総論1：ケアとは、セルフケアとは（寺山）				左記の意味を調べる		
2. 総論2：セルフケアの低下・障害と獲得・自立への方策（寺山）						
3. 総論3：セルフケアの自立を支援する法的システム・機関等（寺山）				左記のテーマに該当する法制度・機関等をあげておく		
4. 実践編1：関連病院看護部におけるセルフケア支援①（河崎病院）				河崎病院看護部をネットで調べる		
5. 実践編2：関連病院看護部におけるセルフケア支援②（水間病院 仲村）				水間病院看護部をネットで調べる		
6. 実践編3：精神障害者が地域で暮らしていくためのメンタルヘルスケアと支援法（谷口）				あなたのメンタルヘルスを考える		
7. 事例を通して障害児者・高齢者のセルフケア支援を考える（寺山）・				「セルフケア自立」の自叙伝又は小説等を読む		
定期試験（期末レポート）						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	■レポート	100%	□定期試験 %
	基準等			「レポート課題」は7回目の授業で提示する。与えられた課題を講義内容と絡めて深く考察しているかがポイント。手書きを要求するので、文字や文章も採点対象とする		□その他 %
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
		適当な著作がないので特に定めない				
参考文献	安酸史子他	「NURSINGGRAPHICUS セルフケアの再獲得 第2版」		メディカ出版		2015
	広井良典	ケア学		医学書院		2000
履修要件等	[地域・予防医学的リハビリテーション]科目区分にあるので、地域・在宅生活支援に関心のある学生を特に歓迎する					
研究室	1号館1階 寺山研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 13：00～14：30		

科目No.	SRP10-3E, SRO05-3E, SRM03-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	アロマテラピー		担当教員	武田 ひとみ		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	前 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と授業内容の関連						
授業内容の要約		疾患の治療、痛みやストレスの緩和等に役立つ補完・代替療法のひとつでもあり、セルフケアの方法でもあるアロマテラピーについて正しい知識を身につける。 アロマセラピーとは何なのか？どのように心身に作用するのかについて正しく理解し、簡単な実習を通じてセルフケアとしてのその手法を体験する。				
学修目標 到達目標		1. アロマテラピーについて正しい知識を身につける 2. ストレスに関連した心身の不調について理解する 3. 簡単なアロマテラピーの手法を体験する 4. 補完・代替療法への利用において精油選択の方法を知る				
授業形態 授業の進め方		短期間なので基礎理論の理解のための講義中心。授業内作成提出物や翌日までの課題もある。授業時は集中し、課題は必ずやってくる。受講学生は生理学を既に習得し、十分理解している状態であることが望ましい。アロマテラピーを二日間で完全に理解することは不可能であるが、安全にアロマテラピーを利用できるための基礎知識は習得させたい。				
授業計画				授業時間外に必要な学修	30 分以上	
1. アロマテラピーを学ぶとはどういうことか				授業内で指示された課題を完成させておくこと		
2. 精油とはなにか						
3. 精油の体内への経路、作用について（基礎的な生理学の復習含む）						
4. アロマテラピーのいろいろな手法。手法の一つを体験（エアフレッシュナー作成）						
5. ストレス反応について（神経系、内分泌系の復習含む）						
6. コンサルテーションとトリートメントについて						
7. コンサルテーションロールプレイとカルテ作成						
8. カルテに基づくブレンドオイル作成						
定期試験（期末レポート）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	■レポート 80%	□定期試験 %	■その他 10%	
	基準等	実習で使用する質問紙の作成課題（二回目の授業時に持参）	コンサルテーションロールプレイと実際のブレンドオイル作成後の複数のレポート		実習態度、授業時の質疑応答	
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年	
	青 暢子ほか	『アロマテラピーコンプリートブック上巻』		BAB ジャパン出版局	2005	
参考文献	特に指定しない					
履修要件等						
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。		

科目No.	SRP04-3E, SRO08-3E, SRM05-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	予防医学		担当教員	武田 雅俊		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	後 期 (16h)
	作業療法学					
	言語聴覚学					
教員の実務経験と授業内容の関連						
授業内容の要約		近年、医学分野では、病気になったら治すという「治療医学」に対し、病気にならないようにより健康の増進をはかり、発病を未然に防ぐ「予防医学」がますます重要視されている。授業では、予防医学についての基本的概念、戦略方法、具体的疾患（特に認知症と生活習慣病）に対するリスク要因と予防法について教示する。				
学修目標 到達目標		1. 健康と疾病の概念を理解できる 2. 予防医学の基本と理念がわかる 3. 予防医学の戦略法を学ぶ 4. 具体的疾患（認知症と生活習慣病）におけるリスク要因と予防について理解できる				
授業形態 授業の進め方		参考資料を配布し、授業はスライドと〇×カードを用いて双方向の授業をする。。				
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 健康と疾病の概念						
2. 疾病予防の概念と方法						
3. ポピュレーションストラテジーとハイリスクストラテジー						
4. 生活習慣病の疫学と予防						
5. 悪性新生物のリスク要因と予防						
6. 脳血管障害のリスク要因と予防						
7. 心疾患、脂質異常症のリスク要因と予防						
定期試験（期末レポート）						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 30%	■レポート 30%	■定期試験 30%	■その他 10 %	
	基準等	毎回の小テスト	レポート提出	授業の内容を全般についての理解度を評価する	授業への参加度、および授業態度を評価。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
参考文献						
履修要件等						
研究室	1 号館 1 階 学長室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける		

科目No.	SRP08-3E, SRO10-3E, SRM04-3E			授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	介護予防論			担当教員	今岡 真和		
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション			選択必修	1 単位	後 期 (16h)
	作業療法学						
	言語聴覚学						
教員の実務経験と授業内容の関連	介護老人保健施設における要支援、要介護者への理学療法業務実践から予防の重要性を教示できる また、健常高齢者のポピュレーションアプローチを実施しており、現場に必要なことを理解できる。						
授業内容の要約	介護予防とは「要介護状態の発生をできる限り防ぐ（遅らせる）こと、そして要介護状態にあってもその悪化をできる限り防ぐこと、さらには軽減を目指すこと」と定義される。この分野で特に注目しなければならないフレイル予防、サルコペニア予防、ロコモティブシンドローム予防、転倒予防、認知症予防、尿失禁予防、口腔機能改善などを概説する。						
学修目標 到達目標	1 要介護化のプロセスについて説明できる 2 各老年期の問題と予防の方法を説明できる						
授業形態 授業の進め方	・講義とグループワークを中心に授業を進める。 ・高齢期の特徴を復習して本講義に取り組むことが望ましい。						
授業計画					授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 老年症候群と介護予防、これからの介護予防					現在の日本における現状をニュースソース		
2. 地域包括ケアシステムと介護予防、住民主体の介護予防					近隣自治体の取り組み		
3. 世代間交流による介護予防実践、介護予防のモデル紹介					近隣自治体の取り組み		
4. 高齢者の向けの筋力向上トレーニング					近隣自治体の取り組み		
5. フレイル予防プログラム、認知機能低下予防プログラム					実践の取り組み理解		
6. サルコペニア予防プログラム、口腔機能向上プログラム、栄養改善					実践の取り組み理解		
7. 介護予防と権利擁護					メディアリテラシー		
定期試験（期末レポート）							
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 20%	□レポート	%	■定期試験 80%	□その他	%
	基準等				成績は小テスト・期末テスト（持ち込み不可）を総合して評価する。		
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年
	鈴木隆雄	完全版介護予防マニュアル			法研		2015 年
参考文献							
履修要件等							
研究室	1 号館 5 階 共同研究室			オフィスアワー	毎週水曜日 12：00～13：00		

科目No.	SGR01-3R		授業形態	講義・演習	開講年次	3 年次
授業科目名	研究法（PT）		担当教員	今岡 真和		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	卒業研究		必 修	1 単位	前 期（30h）
教員の実務経験と 授業内容の関連	システマティックレビュー、ランダム化比較試験など大規模データを用いた研究解析を多数実施した経験から、データの取扱い、解析方法などを具体的に教示できる。					
授業内容の要約	理学療法学について研究する様々な方法論、統計学的検定の選択法を学ぶ。また、研究の一連の流れを学び、研究の具体的方法を習得する。					
学修目標 到達目標	1. 研究データ分析のための基礎的な統計処理等を理解する 2. 研究の一連の過程・方法論を理解し、研究計画を立案する					
授業形態 授業の進め方	講義および課題に対する演習とする。 卒業研究に向けての第一歩である。積極的な授業参加を期待する。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. EBM と EBPT について			実験、調査、文献検索など。			
2. 研究デザインの紹介、研究テーマの選定			実験、調査、文献検索など。			
3. 卒業研究の実際（本学の卒業研究発表の聴講）			実験、調査、文献検索など。			
4. 統計学的分析：2 群の差の検定			実験、調査、文献検索など。			
5. 統計学的分析：3 群以上の差の検定			実験、調査、文献検索など。			
6. 統計学的分析：名義尺度の検定			実験、調査、文献検索など。			
7. 統計学的分析：相関・回帰分析			実験、調査、文献検索など。			
8. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】①			実験、調査、文献検索など。			
9. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】②			実験、調査、文献検索など。			
10. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】③			実験、調査、文献検索など。			
11. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】④			実験、調査、文献検索など。			
12. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】⑤			実験、調査、文献検索など。			
13. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】⑥			実験、調査、文献検索など。			
14. 卒業研究演習【指導教員別に指導のもとで計画に沿って研究を進める】⑦			実験、調査、文献検索など。			
定 期 試 験（期 末 レ ポ ー ト）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	■定期試験 50%
	基準等					■その他 50%
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	山本澄子 他	すぐできる！リハビリテーション統計		南江堂		2012 年
参考文献	山田実	PT・OT のための臨床研究はじめの一步		羊土社		2016 年
履修要件等	3 年次前期までの全ての専門科目・専門基礎科目を履修していることが望ましい。					

研究室	1号館5階第3共同研究室	オフィスアワー	毎週水曜日 12:00～13:00
-----	--------------	---------	-------------------

科目No.	SBP09-3E		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	動作分析学		担当教員	小 峯 武 陸		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	基礎理学療法学		選択必修	1 単位	後 期 (16h)
教員の実務経験と 授業内容の関連						
授業内容の要約	日常生活動作を客観的に分析するために、臨床で汎用性の高い計測器機を使用して身体運動を評価できる。また、そこから得られたデータの解釈を模索し、意味を理解する。					
学修目標 到達目標	1. 動作を遂行するのに必要な要素を説明できる 2. 客観的データを取る準備や工夫をする 3. 算出方法を理解し、応用する 4. 得られたデータから動作を模倣する 5. 動作とデータの関係性を考察する					
授業形態 授業の進め方	● ソフトをダウンロードするために必要な、ノート型 PC が必要である。 ● 実習と演習形式を中心に行う。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		90 分以上
1. PC の環境と準備						
2. 重心位置の求め方とその原理				左項目の復習		
3. デジタルカメラからの角度算出方法Ⅰ 理論				左項目の復習		
4. デジタルカメラからの角度算出方法Ⅱ 実践				左項目の復習		
5. デジタルカメラからの角度算出方法Ⅲ 実践				左項目の復習		
6. 床反力計の原理と計測				左項目の復習		
7. 筋電図計の原理と計測				左項目の復習		
定 期 試 験 (期 末 レ ポ ー ト)						
8. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 20%	■レポート 80 %	□定期試験 %	□その他 %	
	基準等	授業全般のレポートの提出				
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	特になし					
参考文献						
履修要件等						
研究室	1 号館 4 階 第 3 研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 12 : 10 ~ 12 : 50		

科目No.	SBP07-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床運動学Ⅱ		担当教員	村西 壽祥		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	基礎理学療法学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	理学療法士として実務経験のある教員が講義を行う。					
授業内容の要約	正常歩行の運動学・運動力学について学習する。 運動学的・運動力学的知識をもとに、姿勢および動作の観察・分析方法について学習する。					
学修目標 到達目標	1. 正常動作とは何かを理解できる 2. 正常歩行の運動学・運動力学的な観察・分析が理解できる 3. 基本動作の運動学的・運動力学的な観察・分析が理解できる					
授業形態 授業の進め方	講義は教科書および板書を中心に進める。 解剖学、機能運動学の理解が重要である。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 正常歩行① 基本的用語			復習：歩行に関する用語の整理			
2. 正常歩行② 時間的・空間的因子			復習：重心・歩幅・重複歩・ケイデンス			
3. 正常歩行③ 各関節運動とその役割			復習：歩行時の各関節運動の意味			
4. 正常歩行④ 歩行時の筋活動とその役割			復習：歩行時の各筋活動の時期と意味			
5. 正常歩行⑤ 歩行時の関節モーメント			復習：歩行における関節モーメントの意味			
6. 姿勢と動作の観察・分析① 力学的基礎			復習：基本的な力学の整理			
7. 姿勢と動作の観察・分析② 姿勢と支持基底面			復習：支持基底面と安定性			
8. 姿勢と動作の観察・分析③ 重心位置と支持基底面			復習：重心と支持基底面との関係			
9. 姿勢と動作の観察・分析④ 重心線と関節モーメント			復習：重心線と関節モーメントとの関係			
10. 姿勢と動作の観察・分析⑤ 重心位置の確認方法			復習：視覚による重心位置の確認方法			
11. 姿勢と動作の観察・分析⑥ phase の分け方			復習：phase 毎の分析方法			
12. 姿勢と動作の観察・分析⑦ 立ち上がりの動作			復習：立ち上がり動作の析方法			
13. 姿勢と動作の観察・分析⑧ 起き上がり動作			復習：起き上がり動作の分析方法			
14. 姿勢と動作の観察・分析⑨ まとめ						
定期試験 (期 末 レ ポ ー ト)						
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 3 0 %	□レポート %	■定期試験 7 0 %	□その他 %	
	基準等	毎回、授業内で行う小テストの平均点を定期試験テストに加算する		記述試験のみ (記号問題, 選択問題は実施しない), 解答は説明することを求める		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	Donald A Neuman	「筋骨格系のキネジオロジー原著第 2 版」		医歯薬出版		2015
参考文献	月城慶一ほか	観察による歩行分析		医学書院		2005
	藤沢宏幸編著	データに基づく臨床動作分析		文光堂		
履修要件等	機能運動学, 臨床運動学 I					
研究室	1 号館 5 階 第 21 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 12 : 10～13 : 00		

科目No.	SBP08-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床運動学演習		担当教員	今岡 真和		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	基礎理学療法学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	病院や介護老人保健施設における様々な障害像を呈する患者や利用者の動作分析を 10 年に渡って実施してきたことから、動作のとらえ方や動作の成り立ちなどについて要点を解説出来る。					
授業内容の要約	運動学・運動学実習での学習をもとに、運動や動作の観察・分析を行い、臨床における諸現象に対する理学療法評価能力を向上する。					
学修目標 到達目標	1. 基本的な姿勢や動作の観察・分析方法(記録方法)を理解し、実践できる 2. 姿勢・動作観察の記録から問題点の想起や整理ができる 3. 代表的な姿勢・動作障害における理学療法評価が想起できる					
授業形態 授業の進め方	動作分析の基本事項の復習や解説をもとに、グループに分かれて基本動作の分析を行う。実際にグループごとの動作観察(実技)では講義時間内に目的の動作の分析結果を完成させる。その後、教員からの解説を加える。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 動作観察の記録方法			グループワーク			
2. 動作の流れを記録する			グループワーク			
3. 動作観察の意味を理解する			グループワーク			
4. 動作観察実践：寝返り(体幹)			グループワーク			
5. 動作観察実践：寝返り(体幹)の解説			グループワーク			
6. 動作観察実践：起き上がり(上肢・体幹)			グループワーク			
7. 動作観察実践：起き上がり(上肢・体幹)の解説			グループワーク			
8. 姿勢観察実践：座位			グループワーク			
9. 姿勢観察実践：座位の解説			グループワーク			
10. 動作観察実践：立ち上がり(下肢・体幹)			グループワーク			
11. 動作観察実践：立ち上がり(下肢・体幹)の解説			グループワーク			
12. 姿勢観察実践：立位			グループワーク			
13. 姿勢観察実践：立位の解説			グループワーク			
14. 動作観察実践：歩行			グループワーク			
定期試験 (期 末 レ ポ ー ト)						
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 20%	□レポート	%	■定期試験 80%	□その他 %
	基準等	動作観察・分析の課題をグループにて検討し内容を記録用紙にまとめて提出する			動作観察に必要な基礎知識を把握しているか問う問題を	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	藤澤宏幸	「臨床動作分析」		文光堂		2016 年
履修要件等						
研究室	1 号館 5 階 共同研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 12:00～13:00		

科目No.	SPT14-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	神経系理学療法学		担当教員	畑中 良太、吉尾 雅春		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		必 修	2 単位	前 期 (60h)
教員の実務経験と授業内容の関連	病院での臨床経験のある教員が、その経験を生かして、神経系理学療法の基本的な知識と手法、神経系理学療法についての考え方について講義する。					
授業内容の要約	・脳卒中について、その疾患の概要と病態を理解する。 ・理学療法の理論と実際（介入方法）について学び、技術を習得する。					
学修目標 到達目標	1. 中枢神経障害の捉え方が理解できる 2. 脳血管障害片麻痺の見方が理解できる 3. 神経系理学療法の評価と治療の関係が理解できる					
授業形態 授業の進め方	概要を講義形式にて行い、実技練習や模擬症例についてグループワークを行う。 また、確認テスト等を行い、理解度の確認を行う。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 脳・神経の解剖生理			復習：脳葉、脳回について			
2. 脳の血管			復習：血管の支配領域について			
3. 脳血管障害			復習：脳梗塞、脳出血について			
4. 脳画像			復習：CT、MRI の見方			
5. 脳の可塑性とリハビリテーション			復習：ペナンブラについて			
6. 意識障害とリスク管理			復習：急性期リスク管理について			
7. 運動障害			復習：CI 療法について			
8. 筋緊張異常・反射異常			復習：筋緊張と反射の関係			
9. 感覚障害			復習：感覚検査の手順			
10. 注意・遂行機能障害			復習：転倒との関連			
11. 失認症			復習：半側身体失認について			
12. 半側空間無視			復習：プリズム眼鏡の使用法			
13. 失行症			復習：言語との関連			
14. 精神知能障害			復習：うつ、アパシーについて			
15. 姿勢定位障害			復習：pusher 症候群について			
16. 姿勢バランス障害の評価			復習：FBS の手順			
17. 姿勢バランス障害の理学療法			復習：課題特異的戦略			
18. 運動失調の評価			復習：SARA の手順			
19. 運動失調の理学療法			復習：フィードバック制御の賦活			
20. 脳血管障害の痛み			復習：肩手症候群について			
21. 二次的機能障害			復習：廃用症候群の予防			
22. 起居動作障害			復習：起き上がり、立ち上がりの誘導			
23. 片麻痺の歩行			復習：片麻痺歩行の特徴			
24. SIAS			復習：SIAS の手順			
25. 模擬症例検討（グループワーク）			課題：模擬症例の検討			
26. 特別講義（脳血管障害の理解）			復習：脳血管障害の症状			
27. 特別講義（肩関節の問題）			復習：肩手症候群の予防について			
28. 特別講義（股関節の問題）			復習：姿勢保持筋と股関節の関係			
29. 特別講義（基底核ネットワークの障害）			復習：大脳基底核のニューラルネットワーク			

定期試験（期末レポート）					
30. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）					
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	□レポート %	■定期試験 90%	□その他 %
	基準等	各授業での内容についての理解度を評価する		授業の内容全般についての理解度を評価する	
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	原寛美 ほか	「脳卒中理学療法の理論と技術 第2版」		メジカルビュー社	2017
	細田多穂 ほか	「神経筋障害理学療法学テキスト」		南江堂	2018
参考文献	吉尾雅春 ほか	「神経理学療法学 第2版」		医学書院	2018
	千野直一 ほか	脳卒中の機能評価 SIAS と FIM		金原出版株式会社	2012
履修要件等	特になし				
研究室	3号館2階 第29研究室			オフィスアワー	毎週金曜日 12:00～13:00

科目No.	SPT15-3R		授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	神経系理学療法学実習		担当教員	畑中 良太・肥田 光正・今井 亮太		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		必 修	2 単位	前 期 (60h)
教員の実務経験と授業内容の関連	病院での臨床経験のある教員が、その経験を生かして、脊髄障害、神経筋疾患、および脳性麻痺など小児疾患の基本的な理学療法に関する知識と手法について講義する。					
授業内容の要約	・脊髄障害、神経筋疾患の概要を理解し理学療法のアプローチを学ぶ ・理学療法に関わる小児疾患について理解し、関わり方を学ぶ					
学修目標 到達目標	1. 脊髄障害の特性の捉え方、基本的な理学療法が理解できる 2. 神経筋疾患の障害の捉え方、基本的な理学療法が理解できる 3. 運動発達障害について理解でき、基本的な理学療法が実施できる					
授業形態 授業の進め方	・講義とグループワーク、プレゼンテーションを併用しながら教授する ・神経系理学療法に必要な基本概念をしっかりと学ぶこと					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 脊髄障害の概要と病態について			講義の復習をしておくこと			
2. 脊髄障害の評価① 急性期の評価						
3. 脊髄障害の評価② 機能障害の評価						
4. 脊髄障害の評価③ 活動、参加レベルについての評価						
5. 脊髄障害の合併症およびリスク管理						
6. 脊髄障害の理学療法① 急性期			講義の復習及び、提示された課題に取り組むこと			
7. 脊髄障害の理学療法② 回復期～生活期、スポーツへの参加						
8. パーキンソン病の概要			復習：パーキンソン病について			
9. パーキンソン病の評価						
10. パーキンソン病の理学療法						
11. 脊髄小脳変性症の概要と評価			復習：脊髄小脳変性症について			
12. 脊髄小脳変性症の理学療法						
13. 筋委縮性側索硬化症の理学療法			復習：筋委縮性側索硬化症について			
14. 多発性硬化症、ギランバレー症候群の理学療法			復習：多発性硬化症、ギランバレー症候群について			
15. 正常な粗大運動発達			復習：歩行までの発達について			
16. 神経学的発達チェック（発達検査）			復習：デンバー式、遠城寺式について			
17. 神経学的発達チェック（姿勢反射）			復習：原始反射について			
18. 神経学的発達チェック（神経学的徴候）			復習：神経学的徴候について			
19. 脳性麻痺の分類			復習：痙直型、アテトーゼ型について			
20. 脳性麻痺の原因			復習：脳室周囲白質軟化症、核黄疽について			
21. 脳性麻痺児の評価			復習：GMFM、GMFCS について			
22. 脳性麻痺児の理学療法			復習：はさみ足、クラウチ歩行について			
23. 筋ジストロフィー総論			復習：デュシェンヌ型について			
24. 筋ジストロフィーの理学療法			復習：重症度分類について			
25. 二分脊椎の理学療法			復習：Sharrard の分類について			
26. ダウン症候群の理学療法			復習：低緊張、合併症について			
27. 発達障害の理学療法			復習：発達障害について			

28. 模擬症例検討（グループワーク）			課題：模擬症例の検討				
定期試験（期末レポート）							
29. 成人領域総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
30. 小児領域総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10 %		□レポート %	■定期試験 90 %	□その他 %	
	基準等	成人領域では、疾患を有する者の動作を模倣し、健常者との違いを考察するための課題に取り組む。 小児領域では、課題・小テストも評価する。			授業・定期試験は、成人領域と小児領域に区分し実施。 定期試験では、授業の内容全般についての理解度を評価。 成績は、両領域を合算し評価。		
教科書		著者		タイトル		出版社	発行年
		細田多穂		「神経筋障害理学療法学テキスト」		南江堂	2018
		上杉雅之 ほか		「イラストでわかる小児理学療法学演習」		医歯薬出版	2018
		細田多穂 ほか		「小児理学療法学テキスト」		南江堂	2018
参考文献		前川喜平 ほか		「乳幼児健診の神経学的チェック法」		南山堂	2017
		大城昌平 ほか		「新生児理学療法」		メディカルプレス	2008
履修要件等		特になし					
研究室		3号館2階第27研究室（代表）			オフィスアワー	毎週月曜日 13:00～14:30	

科目No.	SPT08-3R		授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	運動器系理学療法学実習		担当教員	峰久 京子・中尾 英俊		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		必 修	2 単位	前 期 (60h)
教員の実務経験と 授業内容の関連	運動器疾患の急性期、回復期、維持期の理学療法について、経験を有する教員にて講義、実技を行う。また、臨床経験を踏まえ、疾患部位別の評価の特徴や運動療法のポイントを説明する。					
授業内容の要約	運動器の疾患・障害の病態について解剖学的・運動学的観点から学習する。 代表的な運動器の疾患・障害の病態に基づいた評価・治療の技術方法について学習する。					
学修目標 到達目標	1.身体部位ごとに運動器疾患の病態について説明ができる 2.運動器の疾患・障害について理学療法評価の実技ができる 3.運動器の疾患・障害について理学療法治療の実技ができる					
授業形態 授業の進め方	実技中心の実習授業であり、実技が可能な服装での出席を求める。 教科書以外に必要な資料は講義内に配布する。実技練習は自分たちの時間(自習時間)を使い、きちんと体得すること。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		60 分以上	
1. 運動器傷害に関する病態の解説			基本的な運動器の構造を教科書にて理解する			
2. 肩関節・肩甲骨周囲の運動器傷害			授業で説明した内容を復習する			
3. 肩関節・肩甲骨周囲の運動器傷害の評価			授業で行った実技について練習する			
4. 肩関節・肩甲骨周囲の理学療法実技 1			授業で行った実技について練習する			
5. 肩関節・肩甲骨周囲の理学療法実技 2			授業で行った実技について練習する			
6. 肩関節・肩甲骨周囲の理学療法実技 3			授業で行った実技について練習する			
7. 肘関節・手関節の運動器傷害の評価			授業で説明した内容を復習する			
8. 肘関節・手関節の運動器傷害の理学療法			ここまでの上肢傷害の授業内容を復習する			
9. 股関節の運動器傷害の特徴			授業で説明した内容を復習する			
10. 股関節の運動器傷害：術後療法			授業で説明した術後療法について復習する			
11. 股関節の運動器傷害の評価 1			授業で行った実技について練習する			
12. 股関節の運動器傷害の評価 2			授業で行った実技について練習する			
13. 股関節の運動器傷害の理学療法実技 1			授業で行った実技について練習する			
14. 股関節の運動器傷害の理学療法実技 2			ここまでの股関節の傷害について復習する			
15. 膝関節の運動器傷害の特徴			授業で説明した病態の復習を行うこと			
16. 膝関節の運動器傷害：術後療法			授業で説明した術後療法の復習を行う			
17. 膝関節の運動器傷害の評価 1			授業で行った実技について練習する			
18. 膝関節の運動器傷害の評価 2			授業で行った実技について練習する			
19. 膝関節の運動器傷害の理学療法実技 1			授業で行った実技について練習する			
20. 膝関節の運動器傷害の理学療法実技 2			ここまでの膝関節の傷害の復習を行う			
21. 足部・足関節の運動器傷害の特徴 1			授業で説明した内容を復習する			
22. 足部・足関節の運動器傷害の特徴 2			授業で説明した内容を復習する			
23. 足部・足関節の運動器傷害の評価			授業で行った実技について練習する			
24. 足部・足関節の運動器傷害の理学療法実技			授業で行った実技について練習する			
25. 体幹の運動器傷害の評価			授業で説明した内容を復習する			
26. 体幹の運動器傷害の理学療法実技			授業で行った実技について練習する			
27. 運動連鎖を考慮した理学療法評価			授業で説明した内容を復習する			
28. 運動連鎖を考慮した理学療法実技 1			授業で説明した内容を復習する			
29. 運動連鎖を考慮した理学療法実技 2			授業で説明した内容を復習する			

定期試験（期末レポート）								
30. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）								
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	■定期試験 100%	□その他	%
	基準等					講義内容の理解度を問う		
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年	
	小柳磨毅 編	「実践PTノート 運動器傷害の理学療法(第2版)」			三輪書店		2011	
	島田洋一、高橋仁美 編	「整形外科 術後理学療法プログラム」			メジカルビュー社		2014	
参考文献	特に指定しない							
履修要件等								
研究室		1号館5階 第3共同研究室		オフィスアワー		毎週月曜日 12:10～13:00		

科目No.	SPT10-3R			授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	内部障害理学療法学			担当教員	酒井 桂太		
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	理学療法学	理学療法治療学			必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	理学療法士として内部障害理学療法の実務経験のある教員が指導にあたる。						
授業内容の要約	本講座は内部障害に対する理学療法について学習する。主な疾患は慢性閉塞性肺疾患、心筋梗塞および糖尿病である。						
学修目標 到達目標	1. 慢性呼吸器疾患に対する理学療法について理解する 2. 虚血性心疾患に対する理学療法について理解する 3. 代謝系疾患に対する理学療法について理解する						
授業形態 授業の進め方	講義を中心に行う。慢性閉塞性肺疾患、心筋梗塞および糖尿病に関して、内科学で学んだ内容や関連する臓器の解剖生理学的知識を復習してから授業に臨んでいただきたい。						
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 包括的呼吸リハビリテーション (①pp204-212)				包括的呼吸リハの内容を復習する			
2. 閉塞性肺疾患と拘束性肺疾患の病態理解と画像評価 (①pp114-128)				病態の違いによる PT 内容の相違を復習する			
3. 呼吸理学療法① (①pp 164-173)				呼吸理学療法の手技をまとめる			
4. 呼吸理学療法② (①pp 173-188)				呼吸理学療法の手技をまとめる			
5. 手術前術後のアプローチ (配布資料)				周術期リハの内容をまとめる			
6. 包括的心臓リハビリテーション (配布資料)				包括的心臓リハの内容を復習する			
7. 虚血性心疾患の病態の理解 病態評価① (①pp 9-23)				心不全の病態と分類について復習する			
8. 虚血性心疾患の病態の理解 画像を含む病態評価② (①pp 24-65)				画像評価と心電図について復習する			
9. 正常心電図 (②pp 104-110)				正常心電図について復習する			
10. 心筋梗塞のアプローチ① (①pp 66-99)				心筋梗塞の理学療法についてまとめる			
11. 運動負荷テスト (①pp 213-235)				運動負荷テストの種類について復習する			
12. 糖尿病の病態理解 (①pp 238-244)				糖尿病の診断基準について復習する			
13. 糖尿病の運動療法 (①pp 245-247)				糖尿病の運動療法の適応と禁忌をまとめる			
14. 運動プログラムの作成				運動生理について復習する			
定期試験 (期 末 レ ポ ー ト)							
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)							
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	☑定期試験 100%	□その他 %
	基準等					定期試験は呼吸が試験範囲となる	
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年
	①柳澤 健	「内部障害系理学療法学」			MEDICALVIEW		2010
	②丸岡 弘	「リハビリテーションのためのパットとみてる心電図」			中山書店		2009
参考文献	細田多穂他	「理学療法ハンドブック 第1・3巻」改訂第4版			協同医書		2010
履修要件等	2 年後期までの解剖学・生理学・内科学が履修済みであること						
研究室	1 号館 1 階 理学療法専攻長室			オフィスアワー	毎週月曜日 14：40～16：10		

科目No.	SPT11-3R		授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	内部障害理学療法学実習		担当教員	酒井 桂太		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	理学療法士として内部障害理学療法の実務経験のある教員が指導にあたる。					
授業内容の要約	内部障害理学療法学にて学んだ理学療法を実践するための技術の実習を行う。また、内部障害関連の評価方法についての実習を行う。					
学修目標 到達目標	1. 内部障害に関連する評価方法について理解し、実践できる 2. 呼吸理学療法の技術を実施できる 3. 運動負荷テストに関して理解し、運動処方ができる					
授業形態 授業の進め方	オリエンテーションを行い、デモンストレーションおよび実技の実習を行う。呼吸器の評価をはじめとして、学生同士で互いに体に触れあう実習となる。お互いに学ぶ姿勢で真摯な態度で実習をすること。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 呼吸器の評価① 呼吸不全の定義・問診 (①pp127、144)			呼吸不全の定義を復習する			
2. 呼吸器の評価② 胸部の解剖学的理解・触診 (①pp145-150)			体表解剖を復習する			
3. 呼吸器の評価③ 打診・聴診 (①pp150-154)			打診・聴診の練習をする			
4. 呼吸器の評価④ 呼吸器の検査・測定 (①pp155-156)			呼吸機能検査について復習する			
5. 呼吸理学療法の徒手的テクニック① (①pp167-169、 pp170-173)			徒手的テクニックを練習する			
6. 呼吸理学療法の徒手的テクニック② (①pp175-176、 pp178-181)			徒手的テクニックを練習する			
7. 虚血性心疾患の理学療法 異常心電図判別①			心筋梗塞の心電図を復習する			
8. 虚血性心疾患の理学療法 異常心電図判別②			不整脈の復習をする			
9. 糖尿病の運動処方演習①			計算問題の復習する			
10. 糖尿病の運動処方演習②			計算問題の復習をする			
11. 運動負荷テスト① 運動負荷テストの実際①			運動負荷テストの結果をまとめる			
12. 運動負荷テスト② 運動負荷テストの実際②			運動負荷テストの結果を考察する			
13. 運動指導① 運動指導の実際			運動療法の測定結果をまとめる			
14. 運動指導② 運動指導の実際			運動療法の測定結果を考察する			
定 期 試 験 (期 末 レ ポ ー ト)						
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	☑レポート 10%	☑定期試験 80%	☑その他 10%	
	基準等		運動負荷テストのレポート	定期試験は循環代謝が試験範囲となる	実習態度	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	①柳澤 健	「内部障害系理学療法学」		MEDICALVIEW		2010
	②丸岡 弘	「リハビリテーションのためのパットとみてわかる心電図」		中山書店		2009
参考文献	細田多穂他	「理学療法ハンドブック 第1・3巻」改訂第4版		協同医書		2010
履修要件等	2 年後期までの解剖学・生理学・内科学が履修済みであること					
研究室	1 号館 1 階 理学療法専攻長室		オフィスアワー	毎週月曜日 14：40～16：10		

科目No.	SRP01-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	生活環境学		担当教員	古井 透		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		必 修	2 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	担当教員は介護保険施行 10 年前から地方行政職の理学療法士として実務経験があり、福祉住環境コーディネーター資格 1 回目の合格者で、初期の福祉用具プランナー資格養成講習の講師などを歴任するなど領域への豊富な経験から、福祉住環境コーディネーター2 級レベルの問題解決力を育成するノウハウを持ち、セラピストが福祉住環境整備を進めるエトスを伝える事ができる。					
授業内容の要約	人は環境との相互作用の中で生きる。時として環境が生活者を蝕んだり困らせたりする。障がいと折り合いをつけながら生きる人にとって環境バリアにはどんなものがあるのか追求しつつ、福祉住環境コーディネーター 2 級の資格試験に挑みながら、学修姿勢を確立する。					
	1. 障がい特性に応じた生活への理解を深め、合理的配慮やそれに基づく環境整備をプランできる 2. 福祉住環境コーディネーターにもとめられる倫理・規範にもとづく振る舞いができる 3. 福祉住環境コーディネーター 2 級に合格できる					
授業形態 授業の進め方	授業スライドを事前 DL し予習し、授業後は次回小テストの準備の復習が欠かせないので TEXT のページをあらかじめ示す。授業は冒頭の前回の範囲の小テストのあと、TEXT 範囲の講義を行う。各自が小テストで間違った箇所を TEXT 等で調べ、赤ペンで修正しその日のうちに提出する。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 福祉用具の適応と禁忌（ベッドと移動機器）				教科書 p 346-375 を通読し、前回の復習		
2. 福祉用具の適応と禁忌（リフト、排泄、入浴、自助具、義肢装具）				教科書 p376-400 を通読し、前回の復習		
3. 高齢者の心身特性と在宅介護				教科書 p91-107, p113-123 を通読してお		
4. 障害別の福祉住環境整備（CVA）				教科書 p124-128 を通読し、前回の復習		
5. 障害別の福祉住環境整備（廃用症候群・骨折・認知症）				教科書 p129-143 を通読し、前回の復習		
6. 障害別の福祉住環境整備（廃用症候群・骨折・認知症）				教科書 p143-155 を通読し、前回の復習		
7. 脊髄損傷・脊髄小脳変性症・ALS・切断				教科書 p156-159. p162-164, p167-168		
8. ICF と障害者施策、コーディネーターの役割、インクルージョン				教科書 p50-90, p108－112 を通読し、		
9. 筋ジス・脳性麻痺・内部障害・視聴覚障害・認知行動障害				教科書 p156-161, p 164-167,p169-200		
10. 介護保険制度と住環境				教科書 p2-49, p91-108, p113-122 通読、		
11. 相談援助と福祉住環境整備の進め方				教科書 p76-83, p 200－239 を通読し、復		
12. 福祉住環境整備の基本技術				教科書 p 240-266 を通読し、前回の復習		
13. 生活行為別福祉住環境整備				教科書 p267-315 を通読し、前回の復習		
14. 建築基礎知識と福祉用具プランニング演習				教科書 p 316-345 を通読し、総復習する		
定期試験（期末試験）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）				7 月 7 日福祉 2 級試験直前ブラッシュアップ		
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 30%	□レポート %	■定期試験 70%	□その他 %	
	基準等	毎週提出の、自己修正した小テストの提出内容を評価し積算する。		2020年福祉住環境コーディネーター2 級試験と同等レベルの問題	7 月開催の福祉住環境コーディネーター2 級合格者に配慮して評価する。	
教科書 (いずれか)	著者	タイトル		出版社		発行年
	東京商工会議所	福祉住環境コーディネーター検定試験 2 級公式テキスト改定 5 版		東京商工会議所		2019
	ユーキャン	ユーキャンの福祉住環境コーディネーター2 級 速習レッスン		ユーキャン		2020

参考文献	ユーキャン	ユーキャンの福祉住環境コーディネーター2級 重要過去問&予想模試	ユーキャン	2020
参考文献	ユーキャン	ユーキャンの福祉住環境コーディネーター2級 これだけ！一問一答&要点まとめ	ユーキャン	2020
	HIPS 合格対策プロジェクト	福祉住環境コーディネーター検定試験 2級過去問題集2020年版	ハウジングエージェンシー	2020
履修要件等	日常生活動作学・日常生活動作学実習・義肢装具学・義肢装具学実習を履修済みが望ましい。			
研究室	1号館5階 第20研究室	オフィスアワー	毎週火曜日 11:40～12:40	

科目No.	SRP02-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	地域理学療法学 (含在宅理学療法)		担当教員	古井 透		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		必 修	1 単位	後 期 (30h)
教員の実務経験と 授業内容の関連	介護保険施行 10 年前から、地方行政で理学療法士としての実務経験を重ね、地域住民と直接関与してきた経験から、たとえどんな姿になろうとも人が尊厳ある人間として輝き続ける為の理学療法の在り方について、様々な切り口から伝えることができる。					
授業内容の要約	たとえどんな姿になろうとも人が尊厳ある人間として輝き続けるのに必要な、関わる者としての態度を知り、将来、保健や医療や福祉など地域社会の現場で常にそのことを問い続ける基礎を養う。					
学修目標 到達目標	1. 訪問でのコミュニケーション、通所での自助グループ化について理解できる。 2. 地域理学療法の背景と展望についての見識を深め、それを表出できるようになる。 3. つねに当事者に学ぶ態度を身につけ、自分から積極的に関わる姿勢を追及できるようになる。					
授業形態 授業の進め方	臨床実習班ごとに着席し学修する。通常授業だけでなく指定した地域活動への参加も授業の一環とし、地域リハビリテーション研究会への参加、日本の理学療法の草分け武富由雄先生（神戸大学名誉教授）のハンズオンを含めた特別講義、日本理学療法協会半田一登会長特別講義とその成果演習によって学ぶ。特別授業などは日程変更の可能性がありうる。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 演習(1) 担当症例の予後予測・退院後生活をイメージする			実習担当症例のレポート			
2. 演習(2)「熟達理学療法士の歴史から学ぶ」			受講メモをまとめる			
3. 実技演習(3) 症例の生活行為向上をプログラムする			受講メモをまとめる			
4. 半田一登先生特別授業 「地域理学療法の背景・展望」			受講メモをまとめる			
5. 対話型演習(1)「半田先生の授業に触発された新しい発見」			参考書 pp91-118			
6. 対話型演習(2)「地域理学療法の展望」			レポート提出 (1)			
7. 演習 (4)「通所での自助グループのつくりかた」			各班で事前配布資料をまとめ発表			
8. 演習 (5)「訪問でのラポール形成」			各班で事前配布資料をまとめ発表			
9. 通所ケア と訪問ケアは地域ケアの車輪の両輪			参考書 p120-158			
10. 地域理学療法実習 (1) 障害当事者の語りに学ぶ			参考書 pp164-173、401-402			
11. 対話型演習(4) 地域評価とソーシャルアクション			参考書 pp211-231、pp305-344			
12. 対話型演習(5)「当事者の今から学ぶこと」			レポート提出 (2)			
13. 褥瘡予防・転倒予防			p261-285p 25-49 ,p243-260			
14. 地域リハビリテーション研究会						
15. 地域リハビリテーション研究会			レポート提出(3)			
定 期 試 験 (期 末)						
16. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 40%	□レポート	■定期試験 60 %	□その他 %	
	基準等	特別講義20%、レポート2・3各10%、その他、指定の地域活動レポートも10%		参考書・参考文献・授業資料のみ持込可	指定の地域活動への参加は出席扱いとする	
指定参考書	著者	タイトル		出版社		発行年
	日高正巳 編	地域理学療法にこだわる		文光堂		2010
参考文献	古井正代	「本来あってはならない存在」の立場から産科医療保障制度を斬る (p28-30)		女性たちの 21 世紀 (アジア女性資料センター) No56		2008
	太田仁史	地域リハビリテーション原論		医歯薬出版		2007

	山本和儀（編）	訪問リハビリテーションの実際	医歯薬出版	1996
履修要件等	生活環境学を履修済みのこと			
研究室	1号館5階 第20研究室	オフィスアワー	毎週火曜日 12：10～12：50	

科目No.	SCP07-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床実習指導Ⅲ（P T）		担当教員	峰久 京子・畑中 良太・今岡真和		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	臨床実習		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	臨床現場における理学療法経験、および臨床実習指導の経験のある教員が、その経験を生かして、理学療法評価の基本的な知識と手法、理学療法評価から治療までの流れについて、その考え方やまとめ方について指導する。					
授業内容の要約	後期開講の臨床総合実習に向けて、学内科目の知識の整理や再確認を行う。また、2 年次の臨床検査測定実習での自己課題を振り返り、体験した内容を他の学生間で共有する。3 年次の臨床実習で中心になる評価技術にとどまらず、4 年生での臨床実習を見据えた治療学も念頭に置く					
学修目標 到達目標	1. 代表的な疾患の検査測定を通じて理学療法評価技術を演習して、問題点を考察する。 2. グループでの実技の練習を繰り返し行う。 3. 臨床実習前には事務手続きを含めた実習準備を行う。					
授業形態 授業の進め方	臨床実習に関する内容を順次講義形式にて解説するとともに実技が必要なときには実技の練習、確認を並行して行う。常に、自己評価にとどまらず、他者評価の立場から、他者への関わりをより密にして互いに意見交換を行う。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 臨床総合実習について			実習までのスケジュールを確認			
2. 実習手引きの確認			実習準備の確認			
3. 臨床検査測定実習（2 年次）時の自己課題の確認			2 年次実習で得た課題を確認			
4. スポーツ活動（体育祭）を通じた学生間連携・チームワーク			当日は体調管理に努める			
5. 骨関節系疾患の症例レポートの作成方法			基本的な文章作成と医学情報の収集の仕方			
6. 神経系疾患の症例レポートの作成方法			基本的な文章作成と医学情報の収集の仕方			
7. 呼吸循環器系の症例レポートの作成方法			基本的な文章作成と医学情報の収集の仕方			
8. 実技：介助方法から対象者の状況を知る			起き上がり、座位、立位の介助方法			
9. 実技：介助方法から対象者の状況を知る			立ち上がり、歩行の介助方法			
10. 実技：座位での評価と実技練習			姿勢評価と動作観察			
11. 実技：立位での評価と実技練習			姿勢評価と動作観察			
12. 実技：歩行での評価と実技練習			姿勢評価と動作観察			
13. 模擬症例の理学療法評価 グループワーク			グループワークによる考察とレポート作成			
14. 模擬症例の理学療法評価 グループワーク			グループによる口頭発表			
定 期 試 験（OSCE を含む）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	□定期試験 % ■その他 100%
	基準等					実習に必要な実技の習熟度と、講義内容の理解度を問う
教科書	著者	タイトル			出版社	発行年
	相澤純也、美崎定也、石黒幸治	PT 症例レポート 赤ペン添削 ビフォー&アフター			羊土社	2016 年
参考文献	特に指定しない					

履修要件等			
研究室	峰久：1号館5階 第7研究室 畑中：3号館2階 第29研究室 今岡：1号館5階 第3共同研究室	オフィスアワー	各担当教員オフィスアワー

科目No.	SCP08-3R			授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床総合実習 I (P T)			担当教員	酒井 桂太・理学療法学専攻教員		
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	理学療法学	臨床実習			必 修	8 単位	後 期 (360h) 8 週間
教員の実務経験と 授業内容の関連	理学療法士として実務経験のある教員と実習指導者が指導にあたる。						
授業内容の要約	臨床実習施設において臨床実習指導者の指導監督の下、診療チームの一員となり、理学療法評価から理学療法までの実際を診療参加型臨床実習として行う。 臨床総合実習 I は、主に情報収集、観察、検査・測定、統合・解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案までの初期評価を中心に学び、臨床実習指導者の助言・指導・援助の下に理学療法を実施し、その検証を通して理学療法の理解を深める。						
学修目標 到達目標	1. 理学療法のプロセスを理解することができる 2. 理学療法評価・理学療法の実際を学ぶ 3. 問題点を抽出し、臨床的推論を行うことができる 4. 指導の下で、基本的な理学療法が実施できる						
授業形態 授業の進め方	実地体験学習。実習の手引きをよく確認すること。臨床実習ですので自ら学ぶ姿勢で実習に取り組んでいただきたい。なお、実習後セミナーである各グループの実習報告会にて実習の成果を発表し、積極的にディスカッションしていただきたい。						
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分程度	
・ 8 週にわたり、病院で臨床総合実習を実施する ・ 実習後にセミナーにて症例発表会を行う				毎日の実習体験をデイリーノートにまとめる。 実習報告会用のレジメを A3 用紙 1 枚にまとめる。症例に関する基礎知識を自己学習する。			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	□定期試験	%
	基準等					☒ その他 100% 実習成績と実習報告セミナー、提出物等を総合して判定する。	
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年
		「理学療法学専攻：臨床実習の手引き 第 5 版」					
参考文献	特に指定しない						
履修要件等	実習要件 3) を満たしていること						
研究室	1 号館 1 階 理学療法専攻長室			オフィスアワー	毎週月曜日 14 : 40～16 : 10		

科目No.	SGR01-3R		授業形態	講義・実習	開講年次	3 年次
授業科目名	研究法（OT）		担当教員	上島 健（代表）、作業療法学専攻教員		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	卒業研究		必 修	1 単位	前 期（30h）
教員の実務経験と 授業内容の関連						
授業内容の要約	臨床で働く作業療法士が、対象者の治療等を通して得られた疑問を検証していくことが重要である。本講義では、卒業研究の進め方、研究に関する流れ（目的、対象、分析、結果の解釈や統計的处理方法、考察）について Active Learning にて理解を深め、学修成果として卒業研究に着手する。					
学修目標 到達目標	1. 研究についての理解を深め、プロセスを説明することができる 2. 研究を行うための必要な基礎知識(基本的な統計処理)を理解することができる 3. 研究テーマに沿った文献検索と収集、研究計画の立案、題目設定ができる					
授業形態 授業の進め方	1. 前半 7 回は講義形式で実施し、後半 8 回は主査教員に配属されて指導を受ける。 2. 講義欠席時は、講義日より 1 週間以内に講義資料を担当教員の研究室へ取りに来ること。 3. 授業に関連するルール（出欠・成績等）は、初講日に説明するので遵守すること					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. ガイダンス、卒業研究に向けた概論について【上島】 （教科書 pp4～32）			指定教科書の該当ページを確認する			
2. 研究とは何をするのか、研究の類型【上島】 （教科書 pp33～68）			指定教科書の該当ページを確認する			
3. 研究論文の発表と手続き【上島】（教科書 pp218～232）			指定教科書の該当ページを確認する			
4. 卒業研究発表会 聴講（4 年生卒業研究発表 要旨参照）			指定教科書の該当ページを確認する			
5. 文献研究、調査研究、実験研究【上島】 （教科書 pp69～108）			指定教科書の該当ページを確認する			
6. 事例研究【上島】（教科書 pp109～138）			指定教科書の該当ページを確認する			
7. 研究に関わる基礎知識【上島】（教科書 pp140～216）			指定教科書の該当ページを確認する			
定期試験			指定教科書の該当ページを確認する			
8～15. 卒業研究演習【各指導教員と密に連絡・相談・指導を受けながら研究計画に沿って進める】			主査教員に次回指導日時を確認し、研究計画を作成する。			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 50%		■その他 50%
	基準等			講義1～7は、科目担当教員が評価する(50%：定期試験)。		講義 8～15 は、卒業研究の主査指導教員が取り組み状況进行评估する。
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	山田 孝 編集	「標準作業療法学 専門分野作業療法研究法（第 2 版）」		医学書院		2012 年
	2019 年度 作業療法学専攻卒業兼研究発表会 要旨					
参考文献	主査教員が随時指定する					
履修要件等	3 年次前期までの全ての専門科目・専門基礎科目の履修が望ましい。					

研究室	1号館5階 第14研究室（上島）	オフィスアワー	毎週木曜日 14:40-16:10（上島）
-----	------------------	---------	-----------------------

科目No.	SOT10-3R		授業形態	講義・実習	開講年次	3 年次
授業科目名	義肢装具学（含実習）			担当教員	田丸 佳希	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	身体障害領域（ハンドセラピー）で実務経験がある教員が、その経験を生かして、義肢装具の基礎知識、また Sprint の作成を含めて指導する。					
授業内容の要約	切断者の生活やその臨床支援が行えるように、人体の解剖学的知見、また動作に伴う運動学の知見に基づき、義肢の適応（切断の知識・義手構成の知識・チェックアウト）、 Sprint の名称と適応・ Sprint の作成について経験する。					
学修目標 到達目標	1. 義手・ Sprint の基礎知識（名称・機能・操作等）について説明が出来る。 2. 上腕義手・前腕義手の適応について評価し、その原因を評価することが出来る。 3. Cockup-sprint ・ Short-Opponens-Sprint の作成が出来る。					
授業形態 授業の進め方	授業内は、基礎知識の注入は導管モデルとなるが、各授業の後半ではアクティブラーニングを用いた振り返りと学習進捗状況の確認を行う。また、実技では各学生 2 つの作品を作成する。授業後半コマでは義肢装具の振り返りについてブレインストーミングやラウンドロビンを用いて実施する。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. オリエンテーション				各授業計画に合わせて教科書で予習をする		
2. 義肢装具学の概要				義肢装具の歴史や成り立ちについて学習する		
3. 装具と切断				切断部位の名称を学習する		
4. 装具の構成要素				義手を構成している部品の名称を学習する		
5. 義手のチェックアウトⅠ				前腕義手のチェックアウト項目を学習する		
6. 義手のチェックアウトⅡ				上腕義手のチェックアウト項目を学習する		
7. Sprint の役割とその種類Ⅰ				Sprint の適応について学習する		
8. Sprint の役割とその種類Ⅱ				Sprint の特徴と名称を学習する		
9. Short-Opponens-Sprint の作成Ⅰ				短対立装具の作成手順を学習する		
10. Short-Opponens-Sprint の作成Ⅱ				ポリフレックスⅡを用いて作成し学習する		
11. Cockup sprint の作成Ⅰ				Cockup sprit の作成手順を学習する		
12. Cockup sprint の作成Ⅱ				ポリフレックスⅡを用いて作成し学習する		
13. 下肢装具の種類と適応				下肢装具の名称と使用方法について学習する		
14. 義手装具学のまとめ				各コマでの重点項目を整理し学習する		
定 期 試 験						
15. 総括及びフィードバック				定期試験の解答・解説		
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 100%		□その他 %
	基準等			筆記試験を実施する		
教科書	著者		タイトル		出版社	
	日本作業療法士協会		「作業療法学全書」義肢装具学		共同医書出版社	
参考文献	特に指定しない					
履修要件等						
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室			オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。	

科目No.	SOT04-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	運動器系障害作業療法学			担当教員	上島 健 ・ 南 征吾	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	2 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	病院、介護保険施設、訪問リハビリテーション等の臨床場面で勤務経験のある教員が、その経験を生かして、運動器系障害作業療法についての講義を行う。					
授業内容の要約	骨・関節障害、末梢神経障害による運動器系身体障害およびパーキンソン病などの中枢神経障害による運動器系身体障害について学び、Active Learning にて理解を深める。					
学修目標 到達目標	1. 運動器系身体障害の作業療法について理解する 2. 運動器系身体障害に対する作業療法評価と治療・訓練・援助の実践について理解する 3. OTS として運動器系身体障害者を担当できる基礎知識と基礎技術を修得する					
授業形態 授業の進め方	・ 基本的な内容を中心に講義を進め、必要に応じてプリントを配布、DVD 等も用いる ・ 授業を欠席する場合は本学に電話連絡を行い、翌週までに担当教員まで配付資料を受け取る ・ 後期に履修する臨床総合実習Ⅰに向け、下記以外の疾患についても治療を応用して実施する ・ 授業に関連するルール（出欠・成績等）は、初講日に説明するので遵守すること					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. ガイダンス、骨折及び関節疾患(大腿骨頸部骨折等、教科書 p156-177) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
2. 骨折及び関節疾患(各疾患の評価、教科書 p156-177) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
3. 骨折及び関節疾患(各疾患の治療、Active Learning、教科書 p156-177) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
4. 熱傷(疾患概要、評価、治療、教科書 p199-218) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
5. 神経免疫疾患(疾患概要、多発性硬化症等、教科書 p243-257) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
6. 神経免疫疾患(疾患の評価、教科書 p243-257) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
7. 神経免疫疾患(疾患の治療、Active Learning、教科書 p243-257) 【上島】				指定教科書の確認、授業後の課題レポート		
8. 関節可動域・筋力へのアプローチ（関節の構造と筋の基礎など）【南】				解剖学／生理学で学んだことを復習しておく		
9. 関節リウマチ（疾患の特性について）【南】				整形外科で学んだことを復習しておく		
10. 関節リウマチ（作業療法プログラムの立案、アクティブラーニング）【南】				作業療法の理論を復習しておくこと		
11. 手の外科（疾患の特性について）【南】				整形外科で学んだことを復習しておく		
12. 手の外科（作業療法プログラムの立案、アクティブラーニング）【南】				作業療法の理論を復習しておくこと		
13. 神経変性疾患（疾患の特性について）【南】				神経内科学で学んだことを復習しておく		
14. 神経変性疾患（作業療法プログラムの立案、アクティブラーニング）【南】				作業療法の理論を復習しておくこと		
定 期 試 験						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）【上島・南】				試験内容の復習を行うこと		
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	■レポート 40%	■定期試験 50%		■その他 10%
	基準等	Active Learningを行った成果としてのレポートを評価(上島 20%、南20%)		本試験、再試験は筆記試験により評価(試験配分: 上島25%、南25%)		授業中の態度、Active Learning 関与度(15 回講義)
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	小林 隆司 編集	PT・OT ビジュアルテキスト身体障害作業療法学 1 骨関節・神経疾患編		羊土社		2019
参考文献	島田洋一ら(編)	改定第2版整形外科術後理学療法プログラム		(株)メジカルビュー社		2014
履修要件等	2 年次の臨床検査・測定実習の履修者が望ましい(評価を経験した上での学修)。					

研究室	上島：1号館5階 第14研究室 南：3号館2階 第25研究室	オフィスアワー	上島：毎週木曜日 14:40～16:10
-----	-----------------------------------	---------	----------------------

科目No.	SOT05-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	中枢神経系障害作業療法学		担当教員	上島 健		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	2 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	病院、介護保険施設、訪問リハビリテーション等の臨床場面で勤務経験のある教員が、その経験を生かして、中枢神経系障害作業療法についての講義を行う。					
授業内容の要約	身体障害領域の作業療法について、中枢神経系障害の作業療法を中心に各疾患別の評価から治療について学ぶ。各疾患別の治療回復経過を理解して介入する方針について、Active Learning にて理解を深める。					
学修目標 到達目標	1. 中枢神経系障害の評価、治療・支援について理解ができる 2. 身体障害領域の疾患特性、中枢神経系の作業療法治療過程で不明な点を自ら調べることができる 3. 作業療法学生として、臨床実習に耐えうる基礎知識、基礎技術の習得ができる					
授業形態 授業の進め方	・ 講義資料を綴り込むファイル(2 つ穴、厚さ 3cm 程度)を準備すること。講義欠席時は、担当教員の研究室入口に資料を置くので、講義終了から翌週の講義までに、自ら取りに来ること。 ・ 授業に関連するルール (出欠・成績等) は、初講日に説明するので遵守すること。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. ガイダンス、基礎編:概論(身体障害とは等、教科書 p14-21)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
2. 基礎編:概論(目標設定等、Active Learning、教科書 p14-21)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
3. 作業遂行へのアプローチ(作業遂行とは等、教科書 p22-34)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
4. 同上 (結果の分析等、Active Learning、教科書 p22-34)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
5. 運動学習(運動学習の基礎、理論、因子、評価、教科書 p35-47)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
6. 知覚再学習(感覚・知覚等、教科書 p48-61)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
7. 疾患編:脳卒中(疾患概要等、教科書 p80-112)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
8. 疾患編:脳卒中(評価等、教科書 p80-112)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
9. 疾患編:脳卒中(プログラム等、教科書 p80-112)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
10. 疾患編:脳卒中(治療等、Active Learning、教科書 p80-112)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
11. 疾患編:脊髄損傷 (疾患概要等、教科書 p113-134)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
12. 疾患編:脊髄損傷 (評価等、教科書 p113-134)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
13. 疾患編:脊髄損傷 (プログラム等、教科書 p113-134)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
14. 疾患編:脊髄損傷 (治療等、Active Learning、教科書 p113-134)			指定教科書の確認、授業後の課題レポート			
定 期 試 験						
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)			試験内容の復習を行うこと			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	■レポート 40%	■定期試験 50%	■その他 10%
	基準等			Active Learning を行った成果としてのレポートを評価	本試験、再試験は筆記試験により評価	授業中の態度、Active Learning 関与度
教科書	著者	タイトル			出版社	発行年
	小林 隆司 編集	PT・OT ビジュアルテキスト身体障害作業療法学 1 骨関節・神経疾患編			羊土社	2019
参考文献	千田富義、高見彰淑(編集)	改定第 2 版 リハ実践テクニック 脳卒中			(株)メジカルビュー社	2013
履修要件等	2 年次の臨床検査・測定実習の履修者が望ましい(評価を経験した上での学修)。					

研究室	1号館5階 第14研究室（上島）	オフィスアワー	毎週木曜日 14:40-16:10
-----	------------------	---------	-------------------

科目No.	SOT06-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	高次脳障害作業療法学			担当教員	水野 貴子	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期（16h）
教員の実務経験と 授業内容の関連	臨床経験のある教員がその経験を活かして高次脳機能障害の知識と治療技法を講義し、対象者への対応について指導する。					
授業内容の要約	脳損傷によって障害されるのは運動や感覚だけではない。記憶や言語、物や空間の認知、目的を持った行動などの高次脳機能も障害され、日常生活に大きな支障をきたす。本講義では、講義と治療を考察しながら実践し、高次脳機能障害の治療について理解できるようにする。					
学修目標 到達目標	1. 対象者の症状から高次脳機能障害の特徴を推測できる 2. 高次脳機能障害の作業療法の流れ（情報収集―評価―統合と解釈―目標設定―治療）を理解することができる 3. 高次脳機能障害に対する治療の立案と実施ができる					
授業形態 授業の進め方	講義（講義資料を随時配布、パワーポイント使用）、演習（治療の実施、症例検討） 高次脳機能評価学演習を復習しておくこと。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 高次脳機能障害の作業療法（教科書 pp26-36）				評価の復習を行うこと		
2. 注意障害の作業療法（教科書 pp47-55、128-139、174-183、242-248）				注意障害の復習を行うこと		
3. 半側空間無視の作業療法（教科書 pp112-125、223-240）				半側空間無視の復習を行うこと		
4. 記憶障害の作業療法（教科書 pp56-65、184-191）				記憶障害の復習を行うこと		
5. 認知症の作業療法（教科書 pp155-168、258-265）				認知症の復習を行うこと		
6. 失語・失行・失認の作業療法（教科書 pp69-107、194-222）				失語・失行・失認の復習を行うこと		
7. 症例検討				1-6 回の復習を行うこと		
定 期 試 験						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績 評価方法	項目	■小テスト 10%		■定期試験 90%		
	基準等	復習のための小テストを随時実施し、授業の内容についての理解度を評価する。		授業の内容全般についての理解度を評価する。		
教科書	著者	タイトル			出版社	発行年
	能登 真一	「標準作業療法学 専門分野 高次脳機能作業療法学 第 2 版」			医学書院	2019
参考文献	本田哲三	「高次脳機能障害のリハビリテーション―実践的アプローチ第 3 版」			医学書院	2016
	藤田郁代 ほか	「標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第 2 版」			医学書院	2015
	石合純夫	「高次脳機能障害学 第 2 版」			医歯薬出版	2012
	渋雅子	「作業療法学全書 第 8 巻 高次脳機能障害 改訂第 3 版」			協同医書出版	2011
履修要件等	「高次脳機能評価学演習」が履修済であることが望ましい。					
研究室	1 号館 4 階 第 5 研究室			オフィスアワー	毎週水曜日 12：10～12：50	

科目No.	SOT07-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	高齢期障害作業療法学		担当教員	南 征吾		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期（16h）
教員の実務経験と授業内容の関連	リハビリテーションセンター、専門病院、訪問作業療法における作業療法士として実務経験がある。高齢期における身体的・精神的・社会的特徴を捉え、作業療法の実際について具体的に指導する。					
授業内容の要約	高齢者に対する作業療法の特徴とその介入とのつながりの検討や、核となる作業に焦点をあてた実践の組み立て方を学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. 事例報告をもとに評価項目の妥当性と評価から得られたニーズを説明できることを目指す。 2. 事例報告をもとに作業療法の目標とプログラムを立案できることを目指す。					
授業形態 授業の進め方	専門職としての作業療法の実践に関する根拠となる知識を得る機会とし、それを理解し臨床現場や実習につなげること。作業療法の概念を理解していることが望ましい。また、本講義ではアクティブラーニングとグループワークなどを実施する。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 高齢者のその人らしさを捉える（オリエンテーション）				復習：作業療法の理論を整理する		
2. 高齢者の生活行為を捉える評価と目的 （興味関心チェックリスト役割チェックリストなど）				復習：作業療法の評価表を理解する		
3. 高齢者の作業の捉える実践的評価と目的 （絵カード版興味チェックシート、OQ、OSA-II など）				復習：作業療法の評価表を理解する		
4. 廃用症候群の捉え方① （体験を含む：場所@河崎会看護専門学校）				復習：寝たきりの状態を経験し整理する		
5. 廃用症候群の捉え方② （体験を含む：場所@河崎会看護専門学校）				復習：寝たきりの状態を経験し整理する		
6. 事例検討 （その人らしい作業療法の実践 グループワーク）				復習：作業療法の推論の立て方を整理する		
7. 事例検討 （その人らしい作業療法のプログラムの立案 グループワーク）				復習：作業療法プログラムの立て方を整理する		
定 期 試 験（期 末 レ ポ ー ト）						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 20%	■レポート 10%	■定期試験 60%	■その他 10%	
	基準等	各授業に関する課題があり、その取り組む姿勢や提出物の内容を評価する。	レポート課題があり、提出物の内容を評価する。	定期試験は筆記試験で実施する。	授業への参加度、定期試験の受験資格を失わない出席が必要である。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	特に指定しない					
参考文献	村田和香（編集）	「作業治療学 4 老年期」		協同医書出版		2008
	藪脇健司（編集）	「高齢者のその人らしさを捉える作業療法」		文光堂		2015
履修要件等	高齢期障害評価学演習を履修していることが望ましい					
研究室	3 号館 2 階 第 25 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 12:10～13:00		

科目No.	SOT08-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	内部障害作業療法学		担当教員	南 征吾		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期（16h）
教員の実務経験と授業内容の関連	リハビリテーションセンター、専門病院、訪問作業療法における作業療法士として実務経験がある。内部疾患における身体的・精神的・社会的特徴を捉え、作業療法の実際について具体的に指導する。					
授業内容の要約	基本的な知識の整理をしながら、作業療法で接する内部障害者の治療原則を理解し、適切なリスク管理と生活指導を行えるように学修する。					
学修目標 到達目標	1. 作業療法の対象となる内部障害の概念と種類を知る 2. 内部障害に対する評価と作業療法の概略を述べるができる 3. 内部障害に対してリスク管理ができる					
授業形態 授業の進め方	講義が中心である。資料で進める。 アクティブラーニングを取り入れディスカッションを取り入れた講義をする。 解剖学等基本的知識の復習を行うことが望ましい。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 内部障害の概論（講師：首都大学東京大学院 小林隆司先生）				該当する疾患の内科学の復習をする		
2. バイタルサインとリスク管理				リスク管理について調べる・復習する		
3. 検査所見と身体所見（呼吸、心疾患、サルコペニア、糖尿病、がんなど）				各所見について調べる・復習する		
4. 疾患概要と各種評価（呼吸、心疾患、サルコペニア、糖尿病、がんなど）				各疾患について調べる・復習する		
5. 心疾患に対する作業療法				心疾患について調べる・復習する		
6. がんと人生の最終段階への作業療法				がんについて調べる・復習する		
7. 吸引および呼吸疾患（講師：音羽病院 篠田昭先生）				呼吸疾患について調べる・復習する		
定 期 試 験 （ 期 末 レ ポ ー ト ）						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	☑課題・小テスト 10%	☑レポート 20%	☑定期試験 60%	☑その他 10%	
	基準等	各授業に関する課題があり、その取り組む姿勢や提出物の内容を評価する。	レポート課題があり、提出物の内容を評価する。	定期試験は筆記試験で実施する。	授業への参加度、定期試験の受験資格を失わない出席が必要である。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	PT・OT ビジュアルテキスト	身体障害作業療法学2 内部疾患編		羊土社		2019
参考文献	岩崎テル子ほか	「身体機能作業療法学」第2版		医学書院		2011
	石川 齊ほか	「作業療法技術ガイド」第3版		文光堂		2011
履修要件等	内科学を履修していることが望ましい					
研究室	3 号館 2 階 第 25 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 12:10～13:00		

科目No.	SOT11-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	精神障害作業療法学		担当教員	谷口 英治		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	臨床現場の実務経験を基に、精神医療・保健・福祉の現状を説明し、精神科リハビリテーションの一分野である精神機能作業療法の位置づけと意義、そして疾患別及び対象者の回復状態に応じた作業療法の流れ（評価・介入・成果）を講義する。さらに地域支援の活動の紹介、就労援助などについて症例を通じて学修する。また、対象者への対応の仕方についても演習する。					
授業内容の要約	精神保健福祉対策の概要を学ぶとともに精神障害作業療法の機能、役割、実践と疾患別アプローチへの理解を深める					
学修目標 到達目標	1. 精神障害作業療法を実践するために必要な基礎知識、治療・訓練・援助の内容、方法を学修し説明できる 2. 評価を実施するために必要な基礎的な知識を身に付けることができる 3. 疾患・障害の特性を理解し、疾患・障害に対する作業療法が修得できる 4. 対象者の回復状態に応じた作業療法の評価、治療計画、実施が修得できる					
授業形態 授業の進め方	1. 疾患像をイメージできるよう VTR を媒体にした授業形態 2. 理解の状況・程度に応じた質疑応答とディスカッション 3. まとめと小テスト					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 精神障害（者）とは（資料・VTR）						
2. 精神保健福祉対策の概要(資料配布)			講義で配布した資料を再度復習し、さらに知識を深めるため文献調査しノートにまとめること			
3. 精神障害作業療法の機能と役割 1：定義、対象、目的、方法、内容、治療構造、他（資）			講義で配布した資料を再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと			
4. 精神障害作業療法の機能と役割 2：治療構造論（作業療法を構成する要素：対象者、作業活動、作業療法士、集団、場所と場、時間）、ICF、力動論など（教 1-210-222,参 1-72-125,参 2-278-289）			講義で配布した資料を再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと			
5. 作業療法の実践 1：評価とは、流れ、特性、目的、方法（情報収集、面接、観察、検査、調査など）（資・教 2-54-72,・参 1-128-177, 参 2-12-25,32-41・参 3-70-89）			講義で配布した資料、及び教科書・参考書を再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと			
6. 作業療法の実践 2：治療計画・治療プログラムの立案、治療実施、治療効果（教 1-198-209）			講義で配布した資料を再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと			
7. 疾患別作業療法 1：統合失調症にともなう障害と作業療法（資・教 1-230-236,教 2-74-119、参 3-90-121）			講義で配布した資料、及び教科書・参考書を再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと			
8. 疾患別作業療法：統合失調症にともなう障害と作業療法と小テスト(参 1-231-239・参 3-122-132・VTR)			講義で配布した資料、教科書・参考書、及び小テストを再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと			

9. 疾患別作業療法 2：気分障害にともなう障害と作業療法（資・教 1-236-242,教 2-120-170)				講義で配布した資料、及び教科書を再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと		
10. 疾患別作業療法：気分障害にともなう障害と作業療法と小テスト(参 1-239-246・参 3-260-269・VTR)				講義で配布した資料、教科書・参考書、及び小テストを再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと		
11. 疾患別作業療法 3：神経症性障害に対する作業療法と小テスト（資・教 1-242-244・教 2-171-184・参 3-290-294・VTR)				講義で配布した資料、及び教科書・参考書、小テストを再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと		
12. 疾患別作業療法 4：摂食障害に対する作業療法と小テスト（資・教 2-185-195・参 3-295-230・VTR)				講義で配布した資料、及び教科書・参考書、小テストを再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと		
13. 疾患別作業療法 5：境界例パーソナリティ障害に対する作業療法と小テスト（資・教 2-229-239・参 3-276-280・VTR)				講義で配布した資料、及び教科書・参考書、小テストを再度復習し,ポイントを整理しノートにまとめておくこと		
14. 臨床実習について（教 1-7-26,171-174,279-286)				教科書を再度復習し、ポイントをまとめておくこと		
定期試験（期末レポート)						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説)				知識不足な部分、理解不十分な部分等再度復習し、まとめておくこと		
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	□定期試験 %	□その他 %	
	基準等	国試過去問小テストの実施（授業結果の振り返り）		定期試験を実施。 講義の内容全般、および国試過去問より理解度を評価する。	授業への参加と 取り組み姿勢	
教科書		著者	タイトル		出版社	発行年
		1-田端・谷口・他	臨床精神科作業療法入門		文光堂	2015
		2-朝田隆 他編	改訂 精神疾患の理解と精神科作業療法第2版		中央法規	2012
参考文献		1-山根 寛	精神障害と作業療法 第4版		三輪書店	2010
		2-佐竹 勝編	ゴールドマスターテキスト作業療法評価学 改訂第2版		メジカルビュー	2015
		3.香山 明美 小林 正義 他	生活を支援する 精神障害作業療法—急性期から地域実践まで—		医歯薬出版株式会社	2016
履修要件等		心理学・臨床心理学・精神医学・精神障害評価学・精神障害臨床評価学実習などの知識が必要です。				
研究室		1号館5階 第18研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 16:20～17:00	

科目No.	SOT12-3R		授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	精神障害作業療法学実習		担当教員	大類 淳矢		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	医療機関での臨床経験のある教員が、その経験を活かして、精神障害者の支援に役立つ作業療法での評価法、プログラム立案、実施の方法について、実践的な視点を中心に指導する。					
授業内容の要約	精神障害を持つ対象者の支援に役立つ作業療法を実施するために、疾患別の治療技術・知識を習得する。また対象者に応じた治療プログラム立案から実施に至る流れを習得する。					
学修目標 到達目標	1. 精神科作業療法の治療理論を理解し、説明できる 2. 疾患別作業療法の治療技術を習得し、目的に応じた治療プログラムを立案できる 3. 対象者に応じた作業療法評価から治療プログラム立案を行い、実施に至る工程を説明できる。					
授業形態 授業の進め方	教科書および配布資料を用いながら、講義と演習を行う。演習では小グループに分かれて、症例を用いたアクティブラーニングを行う。日頃から、日常生活を構成する活動に関心や興味を持つことで、治療プログラムのアイデアが広がる。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 精神障害リハビリテーション、作業療法実施の一連の流れ			予習：教科書 p55～p79 を通読する			
2. 疾患別作業療法（統合失調症①）			予習：教科書 p131～p140 を通読する			
3. 疾患別作業療法（うつ病性障害）			予習：教科書 p141～p148 を通読する			
4. 疾患別作業療法（身体表現性障害）			予習：教科書 p149～p154 を通読する			
5. 疾患別作業療法（強迫性障害）			同上			
6. 疾患別作業療法（摂食障害）			予習：教科書 p154～p160 を通読する			
7. 疾患別作業療法（パーソナリティ障害）			予習：教科書 p161～p167 を通読する			
8. 疾患別作業療法（精神発達遅滞）			予習：教科書 p168～p174 を通読する			
9. 疾患別作業療法（広汎性発達障害）			同上			
10. 疾患別作業療法（器質性精神障害）			予習：教科書 p174～p187 を通読する			
11. 疾患別作業療法（てんかん、アルコール・薬物依存）			予習：教科書 p188～p197 を通読する			
12. 疾患別作業療法（統合失調症②）			予習：教科書 p131～p140 を通読する			
13. 地域生活支援			予習：事前配布する資料を熟読しておく			
14. 臨床における作業療法プログラム立案と実施			同上			
定期試験（期末レポート）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）			予習：試験でわからなかった領域を確認する			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	■レポート 10 %	■定期試験 80 %	■その他 10 %	
	基準等		授業時間内に課題を課し、指定期限までに提出する	講義（資料含む）・演習内容の範囲で出題する	授業に臨む姿勢、積極性などを総合的に判断する	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	富岡詔子他	「作業療法学全書 第 5 巻 作業治療学 2 精神障害」		協同医書出版社		2016
参考文献	香山知美 他	「生活を支援する精神障害作業療法」		医歯薬出版株式会社		2017
履修要件等	精神障害評価学、精神障害臨床評価学実習、臨床検査測定実習を履修していることが望ましい					
研究室	1 号館 5 階 第 2 共同研究室		オフィスアワー			

科目No.	SOT09-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	発達障害作業療法学		担当教員	丹葉 寛之		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位	前 期 (16h)
教員の実務経験と授業内容の関連	療育施設で臨床経験がある教員が、実践してきた内容を講義内容に取り入れながら学生がイメージできるように講義を行う。					
授業内容の要約	発達過程における子どもの年令特徴と各種心身機能の障害の学習手段を体験し、作業療法のプログラム作成の方法を学ぶ					
学修目標 到達目標	1. 脳性麻痺の動作分析から、アセスメント、評価計画、プログラム立案について理解することができる 2. 発達障害児を取り巻く地域、他職種連携について理解することができる。					
授業形態 授業の進め方	講義を中心に実施。 シミュレーション、模擬事例などに対するディスカッション、グループ討議なども取り入れながら、臨床現場での思考パターンを養うことに重点を置いた講義を実施する					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 脳性麻痺の治療について（痙直型①）			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
2. 脳性麻痺の治療について（痙直型②）			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
3. 脳性麻痺の治療について（アテトーゼ型）			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
4. 知的障害の治療について			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
5. 発達障害の治療について①			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
6. 発達障害の治療について②			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
7. 特別支援教育における作業療法			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
定 期 試 験						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）			指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 100%		□その他 %
	基準等			成績は定期試験の結果のみで評価します		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	上杉 雅之（監修）， 辛島 千恵子（編集）	「イラストでわかる発達障害の作業療法」		医歯薬出版		2016
参考文献	特に指定しない					
履修要件等						
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。		

科目No.	SRO02-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	地域作業療法学		担当教員	石川 健二		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	地域での予防医学リハビリテーションの経験のある教員が、その経験を生かして他職種との連携を通じた地域ケアシステムの知識と手法について講義する					
授業内容の要約	誰もが住み慣れた地域で安心して生活し続けるために、適宜適切なサービス提供を行う必要がある。保健・医療・福祉の仕組みとその実践について講義する。					
学修目標 到達目標	1. 地域ケアシステムの概要を理解し、各領域における相互作用を理解することができる 2. 地域での作業療法士が関わる具体的な支援策を理解することができる					
授業形態 授業の進め方	講義形式を中心として、適宜グループ演習なども加える。 担当教員が指定した講演会、研修会等への参加を授業出席として考慮する場合がある。					
授業計画					授業時間外に必要な学修	30 分以上
1. オリエンテーション（地域ケアシステムの成り立ち：定義、歴史） pp3-19					予習として授業計画に記載している教科書の次回予定頁の読了を求めます。 毎時間小テストを実施するので、前回授業範囲の復習をしておくこと。	
2. 保健、医療、福祉、介護の領域別に分けた社会保障制度のしくみ pp19-46						
3. 発達、成人、老年期での世代別に分けた支援のしくみ pp19-46						
4. 在宅、医療、施設での生活圏域別に分けた支援のしくみ pp19-46						
5. 介護保険制度 pp47-58						
6. 障害者総合支援法 pp58-65						
7. ソーシャルサポートネットワーク pp66-74						
8. 他職種との協働 pp79-84						
9. 地域作業療法の実践① 支援プログラムとマネジメント pp114-140						
10. 地域作業療法の実践② 医療・介護施設・通所施設・訪問事業所 pp141-156						
11. 地域作業療法の展開① 作業療法地域包括ケアシステム pp161-225						
12. 地域作業療法の展開② 特別支援学校（発達）就労支援（精神・高次脳） pp226-270						
13. 地域作業療法の展開③ 地域移行支援（精神） 認知症対策 終末期支援 pp226-270						
14. 地域ケアにおける実践的な教育について（認知症サポーター養成講座）講座資料						
定期試験（期末レポート）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%		■レポート 20 %		■定期試験 70 %
	基準等	毎回授業にて前回講義分の小テストを課す		認知症サポーター研修及び、演習発表題材に関するレポートを課す		■備考 レポート、授業態度など総合的に判定する。研修会参加を授業に振り替える。
教科書	著者	タイトル			出版社	発行年
	大熊 明	標準作業療法学 地域作業療法学			医学書院	2017
参考文献	特に指定しない					
履修要件等	2 年次までの作業療法評価学を履修していることが望ましい					
研究室	3 号館 2 階 第 28 研究室			オフィスアワー	毎週木曜日 14:40～16:10	

科目No.	SRO03-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	地域作業療法学演習		担当教員	石川 健二		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		必 修	1 単位	後 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	地域での予防医学リハビリテーションの経験のある教員が、その経験を生かして他職種との連携を通じた地域ケアシステムの知識と手法について講義する					
授業内容の要約	グループ活動を通じて対象者のニーズを明らかにし、ケース検討、健康教育、地域づくりなどのテーマに沿ったプレゼンテーションを主とした演習を行う。					
学修目標 到達目標	1. 地域における作業療法士としての課題や問題点を抽出できる 2. 具体的支援策を熟考し議論できる 3. 健康に関する題材を発表できる					
授業形態 授業の進め方	講義形式を中心として、適宜グループ演習なども加える。地域作業療法学の講義と一体的に進める。臨床実習のため変則の時間割になると思われる。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. オリエンテーション						
2 ～10 プレゼンテーション 例：ノーマライゼーション、バリアフリー、ユニバーサルデザイン、介護予防、ヘルスプロモーション、行動変容、環境生理学、精神領域の援助、就労支援、発達支援教育 等のテーマに沿った講義と演習				発表に際してのレジメ作成 スタッフとしての準備・調整		
11～14 グループ討議 発表内容に関する質疑応答 発表内容の評価				発表内容に関する質問を考えておく		
15. 総括及びフィードバック（全講義の振り返り）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 30%	■レポート 20%	□定期試験	%	■その他 50%
	基準等	発表に際してのレジメ作成。スタッフとしての準備・調整	発表用のレポート作成（前期：地域作業療法学からの課題）	無		担当教員が指定した講演会、研修会への参加を出席とする。
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	特に指定しない					
参考文献	適宜 資料配布					
履修要件等	地域作業療法学を履修済					
研究室	3 号館 2 階 第 28 研究室		オフィスアワー	毎週木曜日 14:40～16:10		

科目No.	SRO07-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次	
授業科目名	作業療法管理・運営学		担当教員	谷口 英治			
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間	
	作業療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		必 修	1 単位	後 期 (16h)	
教員の実務経験と 授業内容の関連	臨床現場の実務経験を基に、医療・保健・福祉・教育行政など将来の職場となる組織の管理・運営について講義を行う。						
授業内容の要約	医療・保健・福祉・教育行政など将来の職場となる組織の管理・運営について、また、作業療法の実践を行う医療従事者としての責務と行動範囲や倫理問題について学ぶ。 作業療法における管理学の位置づけ、組織の中の作業療法士の役割、チーム医療・多職種連携とコミュニケーション、診療報酬と記録の管理、作業療法部門の業務管理、職場倫理、諸制度、作業療法臨床実習の管理・運営と指導法などを理解する。						
学修目標 到達目標	1. リハビリテーション医療、特に作業療法部門でなぜ管理・運営学が必要か、その理由は何か、が理解できる。 2. 組織の中の作業療法士の役割が理解できる 3. チーム医療・多職種連携とコミュニケーションの必要性が理解できる 4. 診療報酬と記録の管理が理解できる 5. 倫理とは、職業倫理・研究倫理について理解できる 6. 作業療法に関連する諸制度について理解できる 7. 地域包括ケアシステムについて理解できる 8. 作業療法教育について理解できる						
授業形態 授業の進め方	・配布資料、パワーポイント、板書 ・臨床実習現場に出たときに極めて重要であることを学ぶ						
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. なぜ作業療法部門で管理・運営学の知識・技術が求められるか				配布資料を復習しそれぞれのポイントをノートにまとめ整理しておくこと			
2. 作業療法とマネジメント				同上			
3. 組織の成り立ち・情報・医療サービス等のマネジメント				同上			
4. 医療安全のマネジメント：医療事故の発生とその対応、再発予防の取				同上			
5. 倫理とは、職業倫理・研究倫理について				同上			
6. 地域包括ケアシステムについて				同上			
7. 作業療法教育について				同上			
定期試験（期末レポート）							
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %		■レポート 80 %		□定期試験 %	■その他 20 %
	基準等			授業内で課題発表			授業や課題への取り組み姿勢を重視します
教科書	著者		タイトル		出版社		発行年
	特に指定しない						

参考文献	1. 日本リハビリテーション医学会	「リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン」第2版 リハビリテーション管理・運営実践ガイドブック リハビリテーション職種のマネジメント 作業療法管理学入門	医歯薬出版	2018
	2. 金谷 さとみ			
	高橋 仁美			
	3. 高木 綾一			
	4. 大庭 潤平			
	5. 佐野厚生総合病院	らくらく楽しい医療安全教育 研修にそのまま使えるヒヤリ・ハット小劇場 実録 26 事例	メジカルビュー社 (株)シービーアール 医歯薬出版株式会社 (株)メディカ出版	2018 2018 2019 2018 2012
履修要件等	普段から医療・保健・福祉機関の組織形態や管理運営について考えること			
研究室	1号館5階 第18研究室	オフィスアワー	毎週月曜日 16:20～17:00	

科目No.	SRO06-3E		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	地域ケアシステム論		担当教員	石川 健二		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	後 期（16h）
教員の実務経験と授業内容の関連	地域での予防医学リハビリテーションの経験のある教員が、その経験を生かして他職種との連携を通じた地域ケアシステムの知識と手法について講義する					
授業内容の要約	誰もが住み慣れた地域で安心して生活し続けるためには、適宜適切なケアサービス提供を行う必要がある。保健・医療・福祉機関の総合的な調整をはかる地域ケアシステムの仕組みについて学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. 現状における地域ケアシステムの仕組みを理解することができる 2. 地域の特性を活かした地域ケアシステムを創造することができる					
授業形態 授業の進め方	講義・グループワーク・実践の紹介・施設見学 等を通じて知り得た知識を出し合い、地域ケアシステムでの作業療法士としての意義を討議する					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. オリエンテーション（地域ケアシステムの成り立ち）				発達支援施設について調べる		
2. 地域での作業療法士の役割①発達支援施設				介護老人施設について調べておく		
3. 〃 ②介護老人施設				就労支援施設について調べておく		
4. 〃 ③就労支援施設				居宅サービスについて調べる		
5. 地域包括ケアシステム① 居宅サービス				施設サービスで調べる		
6. 〃 ② 施設サービス				各施設の学んだことをまとめておく		
7. 作業療法士として地域で活躍するためには（グループワーク）						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	■レポート 50%	□定期試験 %	■その他 50%	
	基準等		施設見学に関するレポートを課す		教員が指定した講演会、研修会、地域ケア機関での自主的見学を出席として考慮する。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	特に指定しない					
参考文献	授業にて紹介する					
履修要件等	地域作業療法学を履修済みであることが望ましい。					
研究室	3 号館 2 階 第 28 研究室		オフィスアワー	毎週木曜日 14:40～16:10		

科目No.	SCP07-3R		授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床実習指導Ⅲ（OT）		担当教員	嶋野 広一・南 征吾		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	作業療法学	臨床実習		必 修	1 単位	前期（30h）
教員の実務経験と授業内容の関連						
授業内容の要約	臨床総合実習Ⅰで求められる評価計画の立案及び目的に沿った様々な治療方法を知る。また、事例報告の記載方法や報告の方法を学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. 2 年次の臨床検査測定実習で得た情報や学んだ知識を全体で共有することができる。 2. 観察から評価に必要な情報を見つけ記録を書くことができる。 3. 対象者に合わせた評価、治療を適切に行うことができる。 4. 臨床総合実習Ⅰに向けて、知識・技術を自発的に習得しようと努めることができる。 5. 目的志向による実行する方法を身につけ自己管理能力を高めることができる。					
授業形態 授業の進め方	講義では、事例検討を中心に行い、Active Learning（グループワーク、討論、発表）を行う。 授業時の遵守事項や単位認定方法等は初講日に説明するので、必ず確認すること。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. オリエンテーション 臨床検査測定実習の振り返り、自己課題の確認				シラバス内容の確認		
2. レクリエーション 体育祭の準備				クラスの話し合いに参加し、意見を出し合う		
3. 集団でのレクリエーション 体育祭				クラス全員が参加し、協調して取り組む		
4. 臨床実習に必要な知識・技術の修得（精神障害領域）				授業の復習		
5. 臨床実習に必要な知識・技術の修得（身体障害領域）				授業の復習		
6. 臨床実習に必要な知識・技術の修得（高次脳機能、老年期領域）				授業の復習		
7. 臨床実習に必要な知識・技術の修得（発達領域、療育・就労支援を含む）				授業の復習		
8. コミュニケーションスキルの修得				授業の復習		
9. コミュニケーションスキルの修得				授業の復習		
10. IADL の方法と手段の確認①				クラスの話し合いに参加し、意見を出し合う		
11. IADL の方法と手段の確認②				クラス全体で助け合い、課題を仕上げる		
12. 臨床総合実習Ⅰ前準備-1				実習先情報収集、事前学習(評価計画・治療経過)		
13. 臨床総合実習Ⅰ前準備-2				実習先情報収集、事前学習(評価計画・治療経過)		
14. 臨床総合実習Ⅰ前準備-3				夏期休暇中の実習準備勉強会		
定 期 試 験（原則として実施しないが、再試験として実施することがある）						
15. 総括及びフィードバック（臨床総合実習Ⅰ 実習指導者会議準備）				臨床総合実習Ⅰ 準備の総まとめ、配布物確認		
成績評価方法	項目	■小テスト 20 %	■レポート 20 %	□定期試験	■その他 80 %	
	基準等	授業内に実施する小テストで授業内容についての理解度を評価する。	課題提出を期限内に提出したことを評価する。		授業中の課題取り組み態度、必要物の持参等。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	大阪河崎リハビリテーション大学 作業療法学専攻 実習の手引き 第4版					
参考文献	特になし					

履修要件等	「臨床実習指導Ⅱ」「臨床検査・測定実習」が履修済みであること。		
研究室	1 号館 2 階 第 24 研究室 (嶋野) 3 号館 2 階 第 25 研究室 (南)	オフィスアワー	

科目No.	SCP08-3R			授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床総合実習 I（OT）			担当教員	谷口 英治 / 作業療法学専攻教員		
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	作業療法学	臨床実習			必 修	9 単位	後 期 (405h) 9 週間
教員の実務経験と 授業内容の関連	臨床現場の実務経験を基に、実習学生が主体的に対象者の状態像に関する評価に対し、臨床実習指導者の監督・指導を受けながら、治療の実践並びに治療の効果判定を模倣できているかを臨床教育実習訪問指導にて臨床実習指導者とともに状況を把握し確認・指導する。また、学生が診療の一員として加わり、複数の症例に対し臨床評価から治療の実施の経験を通じて学ぶ診療参加型実習について説明し指導する。						
授業内容の要約	身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、高齢期障害分野から 1 分野の施設にて臨床実習を実施する。臨床の場で対象者（児）の評価法を修得し、さらに治療計画の立案・治療実施を経験し作業療法士としての基本的な役割を実践する。						
学修目標 到達目標	1. 作業療法及び作業療法士の機能と役割について理解することができる 2. 対象者（児）の評価法を修得することができる 3. 治療計画を立案し、治療を実施することができる 4. 治療の結果を踏まえ、予後について考察することができる						
授業形態 授業の進め方	・実習にふさわしい服装で臨むこと ・一般社会常識、マナー、そして社会性が求められるため医療従事者として責任感のある行動・態度に配慮すること。 ・連絡・相談・報告や自己管理に十分注意を払うこと。						
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上	
・身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、高齢期障害分野から 1 分野 9 週間の実習を実施する。さらに 1 週間は通所リハビリテーション又は訪問リハビリテーション分野での実習を行う。 ・対象者（児）の評価を修得し、さらに治療計画の立案・治療実施を経験し、作業療法士としての基本的な役割を実践・経験する。 ・治療結果を踏まえ予後予測について考察する。				評価法を予め修める。また、既存の症例報告書を基に評価・治療計画・治療実施の流れをレビューし、関連する文献や教科書を読んでおくこと			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	□定期試験	%
	基準等					■その他 100 % ① 臨床総合実習 I 評定の結果 ② 臨床実習出席日数 ③ 実習内容（レジュメ、実習ノート、実習態度等） ④ セミナーの参加状況から総合的に評価する	
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年
	臨床実習委員会編	「作業療法学専攻：実習の手引き」 第 4 版			大阪河崎リハビリテーション大学		2017

参考文献				
履修要件等	実習要件 3) を満たしていること			
研究室	各実習担当教員研究室	オフィスアワー	各担当教員 オフィスアワー参照	

科目No.	FCM11-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次	
授業科目名	形成外科学		担当教員	森下 寛史			
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間	
	言語聴覚学	臨床医学および歯科学		必 修	1 単位	後 期 (16h)	
教員の実務経験と授業内容の関連	臨床経験のある教員が、その経験を活かして講義する。						
授業内容の要約	形成外科学の概要を、口腔外科学の観点から説明し、理解する。特に口腔、顎、顔面の構造、機能、疾患と言語障害、咀嚼障害および嚥下障害との関連を口腔外科学的な側面より知る。						
学修目標 到達目標	1. 形成外科、口腔外科の全体像を理解し把握する。 2. 形成外科、口腔外科を理解し、言語聴覚士との関わりを理解する。 3. 言語聴覚士国家試験に合格するための知識を習得する。						
授業形態 授業の進め方	ビデオ、視覚素材を用いて、講義を行う。						
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 口腔、顎、顔面の形態と構造 口腔の形態、構造、解剖について 口腔、顎、顔面の発生、発育				指定された範囲の教科書を予め読んでおくこと			
2. 口腔、顎、顔面の機能 a 咀嚼機能 b 嚥下機能							
3. 口腔、顎、顔面の機能 a 言語機能 b 口腔の診察法							
4. 歯・歯周組織の疾患、口腔ケア							
5. 口腔、顎、顔面の疾患 a 先天異常 (口唇裂、口蓋裂)、b 外傷他 c 炎症							
6. 嚢胞 , 腫瘍							
7. 唾液腺疾患、神経疾患							
8. 顎関節疾患、粘膜疾患、手術療法、再建と機能回復							
定期試験 (期 末 レ ポ ー ト)							
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%		■レポート 10%		■定期試験 80%	□その他 %
	基準等	重要な部分の小テストをする		講義で不足部分はレポートにまとめてもらう		授業の内容全般についての理解度を評価する。	
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年
	道 健一	言語聴覚士のための臨床歯科医学 口腔外科学 第2版			医歯薬出版		
参考文献							
履修要件等							
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室			オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。		

科目No.	FPS04-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床心理学Ⅱ（S T）		担当教員	荒木 郁緒		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	心理学		必 修	1 単位	前 期（30h）
教員の実務経験と授業内容の関連	精神科病院や地域精神保健福祉での臨床経験のある教員が、その経験を生かして、臨床心理の基本的な知識と手法についての考え方について実習を交えながら講義する。					
授業内容の要約	臨床心理学の理論やアプローチを学び、患者との実際のやり取りを学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. “こころ” のあり方を理解することができる 2. 医療従事者として臨床心理学の知識を生かすことができる 3. 人と人との関係の中で何が起こり得るかについて、考え検討することができる					
授業形態 授業の進め方	レジュメや資料プリント配布による講義形式 （グループワーク・心理アセスメントの実習・描画技法を含む）					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. “リンショウシンリガク” とは？（臨床心理の歴史、制度、資格）			復習（レポートにまとめる）			
2. “話を聴く” とはどういうことか？（傾聴、受容、共感）			復習（レポートにまとめる）			
3. 無意識の発見（精神分析理論の歴史の変遷）			復習（レポートにまとめる）			
4. 人と人との間で起こること（転移・逆転移）			復習（レポートにまとめる）			
5. 認知行動療法に学ぶ技法			復習（レポートにまとめる）			
6. ナラティブセラピーに学ぶ技法			復習（レポートにまとめる）			
7. “いま・ここ” に注意を向ける（メンタライジング、イメージ）			復習（レポートにまとめる）			
8. 目の前の人をどうやって見立てるのか？（生涯発達の観点から）			復習（レポートにまとめる）			
9. “こころ” をどうやって見立てるのか？（心理検査、投影法など）			復習（レポートにまとめる）			
10. 正常と異常の狭間について（歴史、文化、制度）			復習（レポートにまとめる）			
11. こころの病の分類とアプローチ（統合失調症、双極性障害など）			復習（レポートにまとめる）			
12. こころの病の分類とアプローチ（人格障害、発達障害など）			復習（レポートにまとめる）			
13. グループワーク（描画体験）			復習（レポートにまとめる）			
14. グループワーク（事例検討）			復習（レポートにまとめる）			
定期試験（期末レポート）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト 0%	■レポート 30%	■定期試験 30%	■その他 40%	
	基準等		各授業の振り返りを提出物（レポート）で評価する。	定期試験にて、授業の理解度を評価する。	授業への参加度や受講態度等で評価する。	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
		レジュメや配布資料を用いて行う				
参考文献		必要に応じてその都度紹介				
履修要件等						
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。		

科目No.	FPS05-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	心理測定法		担当教員	松尾 加代		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	心理学		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と 授業内容の関連						
授業内容の要約	国試に必要な内容を中心に、心理学的測定法の基礎を学ぶ。手法や検査の種類だけではなく、それらの背後にある構成概念を学んでいく。					
学修目標 到達目標	1. 心理測定の目的を理解し、検査の種類と内容を知る 2. 心理測定で得られたデータを適切に分析し、正しく解釈するための基礎を学ぶ					
授業形態 授業の進め方	演習を適宜含めながら、講義形式で行う。毎講義後に、コミュニケーションペーパーを配布し、質問や意見の提出を求める。質問の回答および補足説明は、次の講義の最初に行う。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. イントロダクション：心理測定とは			授業内容の復習			
2. 尺度：名義尺度、順序尺度、感覚尺度、比率尺度			〃			
3. 測定法：質問紙法、観察法、面接法、検査法、評定法			〃			
4. サンプルングと記述統計：母集団と標本、代表値			〃			
5. 信頼性と妥当性			〃			
6. 誤差：恒常誤差、測定誤差			〃			
7. 閾値の測定：調整法、上下法、恒常法、マグニチュード推定法			〃			
8. 評定法：順位法、一対比較法、評定尺度法			〃			
9. 知能テスト：WAIS			〃			
10. 性格・人格テスト：質問紙法、投影法			〃			
11. 行動テスト：TEG II			〃			
12. 因子分析：多次元尺度構成法			〃			
13. 推測統計と検定：標準化			〃			
14. 復習と総合演習（言語聴覚士国家試験）			〃			
定 期 試 験 （ 期 末 レ ポ ー ト ）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 30%	□レポート %	■定期試験 70%	□その他 %	
	基準等	授業内課題を呈示する。		定期試験を実施する。授業の内容全般についての理解度を評価する。		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	特に指定しない					
参考文献						
履修要件等	医療統計学を復習しておくこと					
研究室			オフィスアワー			

科目No.	FSL04-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	音響学（含演習）		担当教員	松井 理直		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	音声言語聴覚医学		必 修	1 単位	前 期（30h）
教員の実務経験と 授業内容の関連						
授業内容の要約	ST の聴覚・構音に関する仕事を行う上で必要となる音響学の基本的概念を学ぶ。特に、(1) 波長 (2) dB (3) フォルマント (4) 音声知覚 (5) マスキング、が要点となる。					
学修目標 到達目標	1. 波長と周波数, dB の計算ができる 2. フォルマントおよび音声知覚の手がかりに関する説明ができる 3. デジタル音声処理に関する説明ができる					
授業形態 授業の進め方	集中講義なので、なにか分からない点があれば、その場ですぐに質問をすること。 国試にも必須の内容なので、授業時間内に内容をきちんと理解すること。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		50 分以上	
1. 音の基本「音とは何か」（配布プリントのタイトル等で確認のこと）			疎密波, 縦波			
2. 振動の物理的性質「スピード、振れ幅、持続時間」と伝播			原波形表示の読み方			
3. 基本周波数と周期・波長との関係			周波数＝秒速÷波長の関係			
4. 周波数レベルの計算とピッチ感覚			オクターブについて			
5. 音の強さと音圧			音圧の倍率＝√強さの倍率			
6. パワーレベルの計算			ベル値の定義			
7. デシベルの計算			音圧レベルの計算			
8. 聴力レベル・感覚レベルの計算			聴力測定との関係			
9. 複合音と音色			調波複合音と倍音			
10. スペクトルの考え方			短時間スペクトルを含む			
11. 共鳴とフォルマント			ソースフィルタ理論について			
12. 母音の音響特性について			母音フォルマントの計算			
13. 子音の音響特性について			フォルマント遷移, フォルマントローカス			
14. 音声知覚とデジタル信号処理			VOT その他			
定 期 試 験						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	□レポート %	■定期試験 90%	□その他 %	
	基準等	授業内容の理解度の確認 (周波数・波長・dB・フォルマントの計算問題)		定期試験を実施。授業内容を理解し、国試に対応できる学力を確認		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
		プリントを配布				
参考文献	今泉敏（編）	言語聴覚士のための「言語学・音声学」 第2版		医学書院		2020 年
履修要件等	聴覚心理学・聴覚検査等の授業内容および指数計算の方法を復習しておくこと					
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。		

科目No.	SGR01-3R		授業形態	講義・実習	開講年次	3 年次
授業科目名	研究法（ST）		担当教員	木村 秀生		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	卒業研究		必 修	1 単位	前 期（30h）
教員の実務経験と 授業内容の関連	各教員が、自身の実務経験に沿った内容を研究テーマとする学生を担当し卒業研究を指導する。					
授業内容の要約	・ 言語聴覚療法研究に取り組むための方法や手順、分析、発表方法について具体例を示す。 ・ 研究の一連の流れを学び、卒業研究に着手する。					
学修目標 到達目標	1. 研究という取り組みについての基本的概念を理解する。 2. 研究の方法論（文献検索と収集・研究デザイン等）を理解し実践する。					
授業形態 授業の進め方	1. 前半 7 回は講義・ディスカッション・プレゼンテーション等を中心に進める。 2. 後半 8 回は研究テーマに沿って配属された教員より指導を受ける。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 言語聴覚障害研究概論（卒業研究の進め方について）			講義の内容を復習しノートにまとめる。			
2. 研究とはなにか。			講義の内容を復習しノートにまとめる。			
3. 文献検索・収集について			講義の内容を復習しノートにまとめる。			
4. 調査研究について			講義の内容を復習しノートにまとめる。			
5. 実験研究について			講義の内容を復習しノートにまとめる。			
6. 事例研究について			講義の内容を復習しノートにまとめる。			
7. まとめ（研究テーマの確定に向けて）			現時点での研究テーマの内容を文章化する。			
8. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
9. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
10. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
11. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
12. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
13. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
14. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
15. 卒業研究演習【配属された各教員のもとで研究を実践する。】			指導を受けた内容をノートにまとめる。			
定期試験（研究内容の途中経過発表）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	■定期試験 50%
	基準等					■その他 50%
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	無し					
参考文献	河野哲也	レポート・論文の書き方入門第 4 版		慶応義塾大学出版会		2018
	佐藤雅昭	流れがわかる学会論文作成 How To 改訂版		メディカルレビュー社		2011
履修要件等	3 年次前期までの全ての専門科目・専門基礎科目の履修が望ましい。					
研究室	号館 5 階 第 16 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 9：30～10：30		

科目No.	SDS03-3R			授業形態	講義	開講年次	3 年次		
授業科目名	言語聴覚障害診断学			担当教員	高橋 泰子				
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間		
	言語聴覚学	障害学総論			必 修	1 単位	後 期 (30h)		
教員の実務経験と授業内容の関連	臨床経験のある教員が臨床現場の現況に即した対応の仕方を解説する。また、OSCE では、病院勤務の言語聴覚士からの評価と指導を受ける。								
授業内容の要約	臨床評価実習に向けての準備								
学修目標 到達目標	1. 臨床評価実習までに社会人・医療従事者としてのマナーや態度を修得する 2. 専門用語を使って簡潔に記録が書ける 3. 基礎的な知識を理解し説明できる 4. 患者様に対する話し方や態度を修得する								
授業形態 授業の進め方	授業は、講義形式と演習形式がある。学生同士で練習することがあるので、欠席する場合は必ず連絡を事前に入れること。また、演習を行うときは、身体・口腔は清潔に保ち、動きやすい服装、タオルを用意されたい。								
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上			
1. ガイダンス									
2. 感染対策―院内感染、清潔・不潔				手洗いの仕方 予習					
3. 移乗				車椅子の仕組み、操作方法 予習					
4. 血圧測定				バイタルチェックの練習 予習					
5. アサーション・トレーニング									
6. 医療面談									
7. スクリーニング検査				失語症関連のスクリーニング検査の練習					
8. スクリーニング検査				改訂水飲み検査の練習					
9. OSCE①				SLTA の練習					
10. OSCE①				小児のスクリーニング検査の練習					
11. 記録の書き方				運動性構音障害のスクリーニング検査					
12. 記録の書き方				神経心理学諸検査の練習					
13. 臨床実習の管理・運営（リスク管理、インフォームドコンセント、				神経心理学諸検査の練習					
14. OSCE②				神経心理学諸検査の練習					
15. OSCE②									
16. OSCE のフィードバック									
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	■レポート	10%	□定期試験	%	■その他	90%
	基準等			OSCE後に自己フィードバックしたレポートを評価する。				OSCE(客観的臨床能力試験)を2回実施する。	
教科書	著者	タイトル			出版社		発行年		
	大阪河崎リハビリテーション大学	実習の手引き 言語聴覚学専攻					2017		
	平野哲雄他 編著	「言語聴覚療法臨床マニュアル 第3版」			協同医書出版社		2014		
参考文献									
履修要件等	臨床基礎実習の単位取得をしておくこと。								
研究室	1 号館 5 階 第 17 研究室			オフィスアワー	毎週水曜日 10:40～12:10				

科目No.	SHB02-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅱ		担当教員	芦塚 あおい		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	高次脳機能障害学		必 修	2 単位	前 期 (60h)
教員の実務経験と授業内容の関連	多くの病院等において実務経験と研究経験のある言語聴覚士の授業により、失語症について、基本的理解と検査方法などの基本的能力を身に付けさせる。					
授業内容の要約	失語症候群の基本概念・症状を理解し、評価・診断の理論・方法を学ぶ					
学修目標 到達目標	1. 失語症患者に対する言語聴覚士としての基本的役割を理解することができる 2. 失語症研究の歴史を理解することができる 3. 失語症候群の基本概念・症状を理解し、評価・診断をすることができる					
授業形態 授業の進め方	講義、演習、小テスト。予習・復習は必ず行うこと。授業態度は評価対象とする。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 失語症の基礎知識			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
2. 失語症の症状 1			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
3. 失語症の症状 2			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
4. 失語症の症状 3			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
5. 失語症のタイプ分類 1			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
6. 失語症のタイプ分類 2			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
7. 失語症の評価の方法と種類			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
8. 失語症の評価 (標準失語症検査:SLTA)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
9. 失語症の評価 (標準失語症検査:SLTA)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
10. 失語症の評価 (標準失語症検査:SLTA)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
11. 失語症の評価 (標準失語症検査:SLTA)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
12. 失語症の評価 (標準失語症検査:SLTA)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
13. 失語症の評価 (WAB)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
14. 失語症の評価 (WAB)			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			

15. 失語症の評価（WAB）				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
16. 失語症の評価（WAB）				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
17. 失語症の評価（WAB）				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
18. 失語症の評価（重度失語症検査）				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
19. 失語症の評価（重度失語症検査）				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
20. 失語症の評価（その他の検査）				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
21. 鑑別診断 1				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
22. 鑑別診断 2				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
23. 評価のまとめ・報告書の書き方				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
24. 神経心理モデル 1				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
25. 神経心理モデル 2				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
26. 失語症のリハビリテーション				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
27. 失語症のリハビリテーション				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
28. 失語症のリハビリテーション				予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること	
29. 復習					
定期試験（期末レポート）					
30. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）					
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 15%	□レポート %	■定期試験 80%	■その他 5%
	基準等	授業内で指示する課題・小テストの結果		授業の内容全般についての理解度	受講態度
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	藤田郁代（編）	標準言語聴覚障害学「失語症学」		医学書院	2009
	小嶋知幸（編）	なるほど！失語症の評価と治療		金原出版	2012
参考文献	種村純（編著）	失語症 Q&A 検査結果のみかたとリハビリテーション		新興医学出版社	2014
履修要件等					
研究室	3号館2階 第30研究室			オフィスアワー	毎週火曜日 12：10 ～ 13：00

科目No.	SHB03-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅲ		担当教員	芦塚 あおい		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	高次脳機能障害学		必 修	2 単位	後 期 (60h)
教員の実務経験と授業内容の関連	実務経験と研究経験のある言語聴覚士の授業により、失語症の言語治療、および高次脳機能障害に対する具体的検査方法などの基本的能力を身に付けさせる。					
授業内容の要約	失語・高次脳機能障害学Ⅰ・Ⅱを基に、評価・診断・リハビリテーションの理論・方法を学ぶ					
学修目標 到達目標	1. スクリーニング検査を実施し、評価することができる 2. 失語症検査を実施し、評価することができる 3. 高次脳機能検査を実施し、評価することができる					
授業形態 授業の進め方	講義、演習、小テスト。授業外での検査練習が必須。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			60 分以上
1. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
2. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
3. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
4. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
5. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
6. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
7. 失語症の言語治療			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
8. 失語症の評価演習（失語症鑑別診断検査）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
9. 失語症の評価演習（失語症構文検査）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
10. 失語症の評価演習（失語症語彙検査）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
11. 失語症の評価演習 （実用コミュニケーション能力検査）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
12. 失語症の評価演習 （標準失語症検査補助テスト）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
13. 失語症の評価演習 （標準失語症検査補助テスト）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
14. 失語症の評価演習 9（神経心理学モデル 1）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			
15. 失語症の評価演習 10（神経心理学モデル 2）			予習:教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習:ノートにまとめ、小テストに備えること			

16. 失語症の訓練立案（神経心理学モデル 3）			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
17. 失語症の評価（WAB）			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
18. 記憶障害の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
19. 記憶障害の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
20. 記憶障害の評価演習（WMS-R）			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
21. 記憶障害の評価演習（WMS-R）			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
22. 記憶障害の評価演習（WMS-R）			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
23. 記憶障害の訓練立案・実施演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
24. 認知症の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
25. 認知症の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
26. 認知症の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
27. 注意機能障害の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
28. 遂行機能障害の評価演習			予習：教科書の該当箇所を予め読んでおくこと 復習：ノートにまとめ、小テストに備えること			
29. 復習						
定期試験（期末レポート）						
30. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 15%	□レポート	%	■定期試験 80%	■その他 5%
	基準等	授業内で指示する課題・小テストの結果			授業の内容全般についての理解度	受講態度
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	種村純（編著）	失語症 Q&A 検査結果のみかたとリハビリテーション		新興医学出版社		2014
	小海宏之	神経心理学的アセスメント・ハンドブック		金剛出版		2016
参考文献		各検査マニュアル				
履修要件等						
研究室	3号館2階 第30研究室			オフィスアワー	毎週火曜日 12:10 ～ 13:00	

科目No.	SLD02-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	言語発達障害治療学 I		担当教員	木村 秀生		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	言語発達障害		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	肢体不自由児に対する臨床経験のある教員が、治療場面の具体的内容について紹介する。					
授業内容の要約	肢体不自由及び重症心身障害に起因する言語発達障害の治療学について講義する。					
学修目標 到達目標	1. 口腔・顔面、呼吸の運動評価を行うための基礎知識を得る。 2. 脳性麻痺及び重症心身障害児の言語発達障害治療に際しての評価の視点や評価方法を理解する。 3. 脳性麻痺及び重症心身障害児の言語発達障害治療に関しての支援技術を理解する。					
授業形態 授業の進め方	動画で肢体不自由児、重症心身障害児の ST 場面を提示し、これまで学修した知識を元に観察記録の作成とそれに基づいたディスカッション等を中心に授業を進める。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 脳性麻痺の定義			講義内容を復習しノートにまとめる			
2. 脳性麻痺の臨床像			講義内容を復習しノートにまとめる			
3. 重症心身障害児の定義			講義内容を復習しノートにまとめる			
4. 重症心身障害児の臨床像			講義内容を復習しノートにまとめる			
5. 肢体不自由児の言語障害とその支援 1			講義内容を復習しノートにまとめる			
6. 肢体不自由児の言語障害とその支援 2			講義内容を復習しノートにまとめる			
7. 肢体不自由児の言語障害とその支援 3			講義内容を復習しノートにまとめる			
8. 肢体不自由児の摂食嚥下障害とその支援 1			講義内容を復習しノートにまとめる			
9. 肢体不自由児の摂食嚥下障害とその支援 2			講義内容を復習しノートにまとめる			
10. 肢体不自由児の摂食嚥下障害とその支援 3			講義内容を復習しノートにまとめる			
11. AAC（拡大・代替コミュニケーション）について 1			講義内容を復習しノートにまとめる			
12. AAC（拡大・代替コミュニケーション）について 2			講義内容を復習しノートにまとめる			
13. コミュニケーションロボットについて			講義内容を復習しノートにまとめる			
14. その他の肢体不自由児について(筋疾患等)			講義内容を復習しノートにまとめる			
定 期 試 験 (期 末 レ ポ ー ト)						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）			講義内容を復習する			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 100%		□その他 %
	基準等			講義内容及び講義で復習することになる生涯発達心理学の内容についても出題し理解度を評価する。		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	無し					
参考文献	三木裕和	重症児教育		クリエイツかもがわ		2004
履修要件等	言語発達障害学 I が履修済みであることが望ましい。					
研究室	1 号館 5 階 第 16 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 9：30～10：30		

科目No.	SLD04-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	言語発達障害治療学Ⅱ (含演習)		担当教員	高橋 泰子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	言語発達障害		必 修	2 単位	後 期 (60h)
教員の実務経験と 授業内容の関連	担当教員は、保育所、幼稚園、小・中・特別支援学校において巡回相談を行っている。そこで出会う発達に障害のある子どもたちの評価や指導について説明を行う。					
授業内容の要約	知的能力障害、自閉スペクトラム症および周辺領域の発達障害（特異的言語発達障害、ADHD など）の発達障害の検査、評価、支援法について解説する					
学修目標 到達目標	1. 発達障害の実際を理解できる 2. 発達障害の心理・教育的検査が正しく実施できる 3. 発達障害の心理・教育的検査の結果、診断と評価ができる 4. 診断と評価をもとに具体的な支援策を考察することができる					
授業形態 授業の進め方	前半は、心理・教育的検査の演習。後半は具体的な支援方法を視聴覚教材を用いながら解説する。心理・教育的検査の手順は正しく覚えること。そのためには、何度も繰り返し練習するのが不可欠である。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 言語発達障害学Ⅱの復習、言語病理学的診断			復習ならびに検査の練習を行うこと			
2. 言語発達障害学Ⅱの復習、言語病理学的診断			復習ならびに検査の練習を行うこと			
3. 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査の概論・解説			復習ならびに検査の練習を行うこと			
4. 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査の解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
5. 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査の解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
6. 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査の解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
7. 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査による診断と支援方法			復習ならびに検査の練習を行うこと			
8. 国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査による診断と支援方法			復習ならびに検査の練習を行うこと			
9. 心理・教育的診断と評価の方法 KABCⅡの概論・解説			復習ならびに検査の練習を行うこと			
10. 心理・教育的診断と評価の方法 KABCⅡの概論・解説			復習ならびに検査の練習を行うこと			
11. 心理・教育的診断と評価の方法 KABCⅡの解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
12. 心理・教育的診断と評価の方法 KABCⅡの解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
13. KABCⅡによる診断と支援方法			復習ならびに検査の練習を行うこと			
14. KABCⅡによる診断と支援方法			復習ならびに検査の練習を行うこと			
15. 心理・教育的診断と評価の方法 新版 K 式発達検査の概論・解説			復習ならびに検査の練習を行うこと			
16. 心理・教育的診断と評価の方法 新版 K 式発達検査の概論・解説			復習ならびに検査の練習を行うこと			
17. 心理・教育的診断と評価の方法 新版 K 式発達検査の解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
18. 心理・教育的診断と評価の方法 新版 K 式発達検査の解説・演習			復習ならびに検査の練習を行うこと			
19. 新版 K 式発達検査による診断と支援方法			復習ならびに検査の練習を行うこと			
20. 新版 K 式発達検査による診断と支援方法			復習ならびに検査の練習を行うこと			
21. 心理・教育的検査法の概説 (CARS、DN-CAS、田中ビネー、ITPA)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
22. 心理・教育的検査法の概説 (CARS、DN-CAS、田中ビネー、ITPA)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
23. 言語発達障害児・知的障害児の支援方法 (INREAL 等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
24. 言語発達障害児・知的障害児の支援方法 (INREAL 等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
25. 自閉症児の支援方法 (TEACCH、SCERTS モデル等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
26. 自閉症児の支援方法 (TEACCH、SCERTS モデル等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
27. 発達障害児の言語聴覚訓練 (ソーシャルスキルトレーニング等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
28. 発達障害児の言語聴覚訓練 (ソーシャルスキルトレーニング等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			
29. 保護者への指導 (ペアレントトレーニング等)			復習ならびに検査の練習を行うこと			

定期試験（期末レポート）					
30. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 90 %	■その他 10%
	基準等			授業・演習の理解を評価する。	授業・演習の参加態度、を評価する。
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	藤田郁代監修 玉井ふみ・深浦順一編	「標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版」		医学書院	2015
参考文献	松本治雄・後上鉄夫編著	「言語障害 事例による用語解説」		ナカニシヤ出版	2000
	小野次朗他編著	「よくわかる発達障害」		ミネルヴァ書房	2007
履修要件等	「言語発達障害学Ⅱ」が履修済みであることが望ましい。				
研究室	17 研究室	オフィスアワー	毎週水曜日 10:40～12:10		

科目No.	SOS01-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	音声障害学		担当教員	和田 英嗣		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	発声発語嚥下障害		必 修	1 単位	後 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	病院での臨床経験がある教員が、その経験を生かして、音声障害の基本的な知識と病態や訓練について講義する。					
授業内容の要約	発声器官の解剖・生理、発声のメカニズムを理解する。音声障害をもたらす疾患、発生機序、病態を学び、音声障害に関する検査、評価、訓練法、薬物治療、手術的アプローチについて学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. 発声器官の解剖・生理、発声のメカニズムが理解できる 2. 音声障害の原因・発生機序・病態が理解できる 3. 音声障害の評価・訓練ができる 4. 無喉頭者の代用音声の理解と訓練法ができる					
授業形態 授業の進め方	座学と実技を行う。様々なテーマに対して、グループ討論・プレゼンテーションを実施し考察を深める。実習や臨床場面を想定して、種々の障害像について理解し、評価・訓練の演習を行う。特に様々な音声障害のリハビリテーションの実技は積極的な態度が望まれる。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 声の特性・物理的特徴			声の 4 つの特性と喉頭の調節について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
2. 発声発語器官の解剖・生理			声に関わる器官の解剖や発声の生理について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
3. 音声治療における言語聴覚士の役割			耳鼻咽喉科医師との連携について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
4. 音声障害の原因疾患			器質性や神経学的、機能性の音声障害について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
5. 検査・評価（喉頭観察機器）			音声障害の診断に用いる喉頭の観察機器について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
6. 検査・評価（聴覚心理学的検査）			GRBAS 尺度について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
7. 検査・評価（発声機能検査・音響分析）			発声機能検査や音響分析について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
8. 音声治療の原理			運動学習理論と神経可逆性の原理について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
9. 音声訓練の実際			間接訓練と直接訓練について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
10. 声の衛生指導			声の衛生指導について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
11. 心因性発声障害・痙攣性発声障害の理解			心因性・痙攣性発声障害について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
12. 音声障害の薬物治療・音声障害の手術的アプローチ			音声障害の薬物療法や音声外科について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
13. 気管切開と気管カニューレ			気管切開とカニューレについて事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			

14. 喉頭摘出と無喉頭音声の理解と実際				喉頭摘出と無喉頭音声の種類について事前に調べておく。復習のために授業後にノートにまとめる。			
定期試験（期末レポート）							
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	■レポート 10%	■定期試験 70%	■その他 10%		
	基準等	授業内に小テストを実施し、授業の内容についての理解度を評価する。小テストについては、6割以上を合格とする。	レポートを授業で提示する。与えられた課題を講義内容と絡めて深く考察しているどうかを評価する。	定期試験を実施する。授業の内容全般についての理解度を評価する。定期試験については、6割以上を合格とする。	グループワークにおける貢献度や各個人に割り当てられたテーマに関する発表内容について評価する。		
教科書		著書	タイトル		出版社		発行年
		刈安誠ほか	「改訂音声障害」		建帛社		2012
参考文献		城本修ほか	「STのための音声障害診療マニュアル」		インテルナ出版		2008
		日本音声言語医学会	「新編 声の検査法」		医歯薬出版		2009
履修要件等		音声言語聴覚医学Ⅰ、Ⅱが履修済であることが望ましい。					
研究室		1 号館 5 階 第 1 共同研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 10：40 ～ 12：10		

科目No.	SOS02-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	運動障害性構音障害学 (含演習)		担当教員	和田 英嗣		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	発声発語嚥下障害		必 修	2 単位	後 期 (45h)
教員の実務経験と 授業内容の関連	病院での臨床経験のある教員が、その経験を生かして、発話の生成メカニズムや運動障害性構音障害の症状、それらの評価・訓練について講義する。					
授業内容の要約	発声発語器官の解剖・生理、運動障害性構音障害をきたす疾患・発生機序・病態を理解し、種々の検査・評価・訓練法の習得を目指す。また補綴的手段、手術的アプローチ、拡大・代替コミュニケーションについて理解する。					
学修目標 到達目標	1. 発声発語器官の解剖・生理、構音のメカニズムが理解できる 2. 運動障害性構音障害の原因疾患・病態・タイプ分類が理解できる 3. 検査・評価・タイプ別訓練法の理解・技法ができる 4. 訓練プログラムの立案と実施ができる					
授業形態 授業の進め方	座学と実技を行う。発声発語のメカニズムを理解した上で、実技を交えながら検査の演習や訓練を実施していく。また、様々なテーマについてグループ討論を実施、まとめたことを発表する。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 発声発語器官の解剖・生理			発声発語器官の構造や仕組みについて事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
2. 構音のメカニズム・神経機構			構音のメカニズム・神経機構について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
3. 運動障害性構音障害の定義			運動障害性構音障害の定義について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
4. 痙性構音障害をきたす疾患と病態			痙性構音障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
5. 弛緩性構音障害をきたす疾患と病態			弛緩性構音障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
6. 運動低下性構音障害をきたす疾患と病態			運動低下性構音障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
7. 運動過多性構音障害をきたす疾患と病態			運動過多性構音障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
8. 混合性構音障害をきたす疾患と病態			混合性構音障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
9. 検査・評価（情報収集・面接・問診）			検査・評価（情報収集・問診）について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
10. 発声発語器官の検査・評価①（実技）			標準ディサースリア検査について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
11. 発声発語器官の検査・評価②（実技）			SLTA-ST について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			

12. 声・構音・プロソディの検査・評価（実技）		声・構音・プロソディの検査・評価について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
13. 評価のまとめ・鑑別診断		評価のまとめ・鑑別診断について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
14. リハビリテーションの流れ		リハビリテーションの流れについて事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
15. 訓練法①（実技）		機能訓練の原理原則について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
16. 訓練法②（実技）		粗大運動の機能訓練について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
17. 訓練法③（実技）		構音動作訓練について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
18. 訓練計画の立案		訓練計画の立案について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
19. 重要疾患とその病態		重要疾患とその病態について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
20. 補綴的手段・手術的アプローチ・薬物治療		補綴的手段・手術的アプローチ・薬物治療について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
21. 拡大・代替コミュニケーション（AAC）		拡大・代替コミュニケーション（AAC）について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
22. チームアプローチ・他施設、地域連携		チームアプローチ・他施設、地域連携について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。				
定期試験（期末レポート）						
23. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	■レポート 10%	■定期試験 70%	■その他 10%	
	基準等	授業内に小テストを実施し、授業の内容についての理解度を評価する。小テストについては、6割以上を合格とする。	レポートを授業で提示する。与えられた課題を講義内容と絡めて深く考察しているどうかを評価する。	定期試験を実施する。授業の内容全般についての理解度を評価する。定期試験については、6割以上を合格とする。	グループワークにおける貢献度や各個人に割り当てられたテーマに関する発表内容について評価する。	
教科書		著者	タイトル		出版社	発行年
		廣瀬肇ほか	「言語聴覚士のための運動障害性構音障害学」		医歯薬出版	2001
参考文献		西尾正輝	「ディサースリア臨床標準テキスト」		医歯薬出版	2007
		熊倉勇実ほか	「運動障害性構音障害」改訂		建帛社	2009
履修要件等		音声言語聴覚医学Ⅰ、Ⅱが履修済であることが望ましい				
研究室		1 号館 5 階第 1 共同研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 10：40 ～ 12：10	

科目No.	SOS05-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	器質性構音障害学（含演習）		担当教員	高橋 泰子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	発声発語嚥下障害		必 修	2 単位	後 期（45h）
教員の実務経験と授業内容の関連	口唇口蓋裂に伴う構音障害の指導を行ってきた。その経験に基づき、本科目の授業を解説していく。					
授業内容の要約	器質性構音障害の中でも、小児の口唇裂・口蓋裂と成人の口腔・中咽頭癌が内容の中心となる。いずれもチームアプローチが不可欠な分野のため、疾患と医学的・補綴的治療に関する基礎的な知識と、言語聴覚士として特化した技法・知識の両方を習得できるよう、演習を含めて講義を行う。					
学修目標 到達目標	1. チームアプローチのための基礎的な知識を習得することができる 2. 器質的構音障害の言語評価ができる 3. 器質的構音障害の言語臨床が行える					
授業形態 授業の進め方	座学と演習をまじえた講義を行う。また、小テストを頻回に実施する。 専門基礎分野の関係科目の知識と統合しながら受講すること。					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 口蓋裂治療におけるチームアプローチ 2pp						
2. 口蓋裂の言語臨床に必要な基礎知識 18-21pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
3. 口蓋裂の言語臨床に必要な基礎知識 18-21pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
4. 口唇口蓋裂の発生機序 3-11pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
5. 言語発達（構音・声）、構音障害の分類 23-35pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
6. 構音障害の分類、構音障害の内容 23-35pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
7. 言語臨床における検査・評価 36-48pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
8. 言語臨床における検査・評価 36-48pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
9. 外科治療・補綴治療・言語治療 50-63pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
10. 外科治療・補綴治療・言語治療 50-63pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
11. 口唇裂・口蓋裂を伴う疾患 69-71pp			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
12. 前半部総括及びフィードバック			前回の講義の復習（小テストを実施する）			
13. 頭頸部癌のリハビリテーションの特徴			学修した範囲の復習			
14. 頭頸部癌の種類とその特徴			学修した範囲の復習			
15. 頭頸部癌の医学的治療			学修した範囲の復習			
16. 頭頸部癌術後の構音の特徴と検査			学修した範囲の復習			
17. 頭頸部術後の構音訓練			学修した範囲の復習			
18. 発話補助手段：PAP 等の補綴的手段の種類			学修した範囲の復習			
19. 発話補助手段の使用法			学修した範囲の復習			
20. 頭頸部術後の摂食嚥下障害 1			学修した範囲の復習			
21. 頭頸部術後の摂食嚥下障害 2			学修した範囲の復習			
22. 口腔・中咽頭癌に対するチームアプローチ			学修した範囲の復習			
定期試験（期末レポート）						
23. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	□レポート %	■定期試験 90%	□その他 %	
	基準等	前回の授業内容の復習するための小テストを毎授業で実施する。		国家試験レベルの選択問題および記述式問題。		
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年	

	斉藤裕恵ほか	「器質性構音障害」	建帛社	2003
参考文献	夏目長門編	言語聴覚士のための基礎知識 臨床歯科学・口腔外科学」	医学書院	
	溝尻源太郎ほか	口腔・中咽頭がんのリハビリテーション」	医歯薬出版	2004
履修要件等	「機能性構音障害」「口腔外科学」「臨床歯科学」「形成外科学」が履修済みであることが望ましい。			
研究室	1号館5階 第17研究室	オフィスアワー	水曜日 10:40～12:10	

科目No.	SOS04-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	機能性構音障害学		担当教員	高橋 泰子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	発声発語嚥下障害		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	構音障害の臨床を行っている。実際に行っている臨床の評価と指導について解説を行う。					
授業内容の要約	発声発語器官の機能、異常構音、構音検査、構音表記、構音障害の診断、指導法について学習する また、検査、表記、指導は具体的に実施できるまで習得する					
学修目標 到達目標	1. 構音検査を正しく実施できる 2. IPA を使って誤り構音が表記できる 3. 構音評価ができる 4. 構音指導ができる 5. 誤り構音が分析できる					
授業形態 授業の進め方	授業は、座学と演習をまじえて進める 演習時には、鼻息鏡、ペンライト、手鏡を持参すること また、学生同士で練習するので、授業前に口腔内の清拭をしておくこと					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 日本語構音の音声学 音声表記法			IPA の復習			
2. 日本語構音の音声学 音声表記法			IPA の復習			
3. 発声発語器官の形態・機能とその異常			頭頸部の機能解剖の復習			
4. 機能性構音障害の検査			「ことばのテストえほん」の検査練習			
5. 機能性構音障害の検査			「構音検査」の検査練習			
6. 機能性構音障害の検査			諸検査が実施できるように練習する			
7. 機能性構音障害の診断			構音障害の音声 CD を聴いて IPA で表記する			
8. 機能性構音障害の診断			構音障害の音声 CD を聴いて IPA で表記する			
9. 口腔機能の訓練法			訓練の実施練習			
10. 口腔機能の訓練法			訓練の実施練習			
11. 小児の構音障害児の指導			事例についての学習			
12. 小児の構音障害児の指導			事例について学習			
13. 小児の構音障害児の指導			事例について学習			
14. 教材作成法			時間内にできなかったものを完成させる			
定 期 試 験 (期 末 レ ポ ー ト)						
15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 90 %		■その他 10 %
	基準等			授業内容についての理解度を評価する。		授業への参加、理解を評価する。
教科書	著者		タイトル		出版社	発行年
	本間慎治編著		「機能性構音障害 改訂」		建帛社	2007
参考文献	飯高京子 若葉陽子 長崎勤 編著		「構音障害の診断と指導」		学苑社	1987
履修要件等	「音声学」「言語発達学」が履修済みであることが望ましい。日本語構音表記を IPA でできる。					
研究室	1 号館 5 階 第 1 7 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 10 : 40～12:10		

科目No.	SOS06-3R		授業形態	講義	開講年次	3 年次
授業科目名	吃音学		担当教員	高橋 泰子 ・ 久保田 功		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	発声発語嚥下障害		必 修	1 単位	後 期 (16h)
教員の実務経験と授業内容の関連	吃音児の臨床経験がある教員が、症例の紹介をしながら非流暢性障害について解説する。					
授業内容の要約	吃音のメカニズムを理解し、検査、評価、治療法について知識と技術を学ぶ。 また、吃音の疑似体験と事例を通じて、吃音者が必要とする支援の在り方を考える。					
学修目標 到達目標	1. 吃音のメカニズムが説明できる。 2. 吃音の検査、評価ができる。 3. 治療法・支援法の立案ができる。					
授業形態 授業の進め方	前半は基礎的な学習（座学）と吃音の疑似体験（実験）を行う。 後半は事例を中心に、検査の選定、評価の仕方、支援の在り方について考える。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 吃音とは一定義、特徴、吃音の発生と原因論、分類、進展				過去の国家試験問題を解いて復習する		
2. 吃音の臨床の流れ―検査、評価、情報収集、診断				過去の国家試験問題を解いて復習する		
3. DAF による吃音の疑似体験（演習）、訓練・治療法				DAF の実験データを分析・考察する		
4. 吃音臨床の実際：プロローグ						
5. 吃音臨床の実際：学童期・思春期の吃音				事例の評価・分析・訓練プログラムの立案		
6. 吃音臨床の実際：青年期・成人期の吃音				事例の評価・分析・訓練プログラムの立案		
7. 吃音臨床のワーク（演習）、吃音臨床を考える（ディスカッション）				事例の評価・分析・訓練プログラムの立案		
定期試験（期末レポート）						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	□レポート	■定期試験 90%	□その他 %	
	基準等	演習のレポートを評価する		授業内容についての理解度を評価する		
教科書	著者	タイトル			出版社	発行年
	小林宏明・川合紀宗編著	「シリーズきこえことばの発達と支援 特別支援教育における 吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援」			学苑社	2013
参考文献	松本治雄・後上鉄夫編著	「言語障害 事例による用語解説 第2版」			カンキョ出版	2000
	都築澄夫 編著	「言語聴覚療法シリーズ 改訂 吃音」			建帛社	2008
履修要件等	「言語発達学」「臨床心理学」が履修済みであることが望ましい。					
研究室	1 号館 5 階 第 17 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 10:40～12:10		

科目No.	SOS03-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	嚥下障害学（含演習）		担当教員	和田 英嗣		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	発声発語嚥下障害		必 修	2 単位	前 期（45h）
教員の実務経験と授業内容の関連	病院や施設、訪問での臨床経験のある教員が、その経験を生かして、摂食嚥下の基本的な知識や症状、それらの評価や訓練について講義する。					
授業内容の要約	摂食嚥下に関わる諸器官と摂食・嚥下のメカニズム、及び摂食嚥下障害の原因疾患、種々の病態について理解し、摂食嚥下障害の評価・訓練、食事指導、摂食嚥下機能に影響を及ぼす要因（高次脳機能、薬剤、環境など）、他職種との連携について学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. 摂食嚥下に関わる器官の解剖・生理・年齢的变化について理解できる 2. 摂食嚥下障害の原因、病態について理解できる 3. 種々の摂食嚥下機能検査について特性、適応、技法、解析方法を理解し、評価できる 4. 摂食嚥下障害の訓練や代償法について理解し、実施できる					
授業形態 授業の進め方	座学と実技を交えながら行う。また、グループ討論やプレゼンテーションを実施、様々なテーマについて考察し、実習や臨床場面での知識の活用に役立てる。実技では、鏡やペンライト・聴診器などを使用します。知識と技術の習得のため、積極的な授業態度が望まれる。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 摂食嚥下器官の解剖・生理・神経機構			摂食嚥下器官の解剖・生理・神経機構について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
2. 摂食嚥下の各段階における障害①			摂食嚥下のメカニズムについて事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
3. 摂食嚥下の各段階における障害②			プロセスモデルについて事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
4. 年齢的变化について			新生児～高齢者の摂食嚥下の年齢的变化について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
5. 障害の発生機序・原因疾患・病態の特徴①			脳血管障害の摂食嚥下障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
6. 障害の発生機序・原因疾患・病態の特徴②			神経疾患の摂食嚥下障害について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
7. 姿勢保持機能との関連			姿勢の調整について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
8. 高次脳機能・薬剤などとの関連			高次脳機能障害と摂食嚥下について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
9. 言語聴覚士が行う検査と評価の理解			言語聴覚士が単独で行える検査について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			
10. 言語聴覚士が行う検査と評価（実技）			言語聴覚士が単独で行える検査の実技について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。			

11. 医師が行う検査と評価の理解			医師が行う検査について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
12. 嚥下内視鏡検査画像の見方・評価			嚥下内視鏡検査（VE）について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
13. 嚥下造影検査画像の見方・評価			嚥下造影検査（VF）について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
14. 基礎訓練（間接訓練）の適応とリスク			間接的嚥下訓練について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
15. 基礎訓練（間接訓練）の実際（実技）			間接的嚥下訓練の実技について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
16. 摂食訓練（直接訓練）の適応とリスク			直接的嚥下訓練について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
17. 摂食訓練（直接訓練）の実際（実技）			直接的嚥下の実技について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
18. 代償法			代償法について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
19. 口腔ケア・気管切開			口腔ケア・気管切開について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
20. 摂食・嚥下障害に対する外科的治療			摂食・嚥下障害に対する外科的治療について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
21. 栄養管理・食形態・代替栄養法			栄養管理・食形態・代替栄養法について事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
22. リスク管理・バイタルチェック（実技）			リスク管理・バイタルチェックについて事前に調べておく。授業後にノートにまとめる。		
定期試験（期末レポート）					
23. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）					
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	■レポート 10%	■定期試験 70%	■その他 10%
	基準等	授業内に小テストを実施し、授業の内容についての理解度を評価する。小テストについては、6割以上を合格とする。	レポートを授業で提示する。与えられた課題を講義内容と絡めて深く考察しているどうかを評価する。	定期試験を実施する。授業の内容全般についての理解度を評価する。定期試験については、6割以上を合格とする。	グループワークにおける貢献度や各個人に割り当てられたテーマに関する発表内容について評価する。
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	倉智雅子	「言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学」		医歯薬出版	2013
参考文献	聖隷嚥下チーム	「嚥下障害ポケットマニュアル」		医歯薬出版	2012
	才藤栄一	「摂食・嚥下リハビリテーション」		医歯薬出版	2016
履修要件等	音声言語聴覚医学Ⅰ、Ⅱ・口腔外科学・形成外科学・臨床神経学を履修していることが望ましい。				
研究室	1号館5階 第1共同研究室（ST）	オフィスアワー	毎週火曜日 10：40～12：10		

科目No.	SHD05-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	補聴器・人工内耳（含演習）		担当教員	馬屋原 邦博		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	聴覚障害		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と授業内容の関連	障害者福祉施設で言語聴覚士として勤務した経験から、聴覚補償機器および福祉用具について授業を行う。					
授業内容の要約	補聴器の種類や原理、補聴器特性測定装置、フィッティング方法、人工内耳等について理解を深める。					
学修目標 到達目標	1. 補聴器のフィッティング方法について理解し、フィッティングができる 2. 補聴装用効果や補聴器特性の測定ができる 3. 人工内耳の原理や調整について理解できる					
授業形態 授業の進め方	講義と実際に補聴器を扱いながら、補聴器の調整や測定を行う。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 補聴器の構造・機能（教科書 pp.164～165）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
2. 補聴器の種類と特徴（教科書 pp.166～168）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
3. 補聴器特性の測定法①（教科書 pp.168～173）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
4. 補聴器特性の測定法②（教科書 pp.168～173）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
5. 補聴器の付属品の調整（教科書 pp.173～176）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
6. デジタル補聴器の機能（教科書 pp.176～178）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
7. 補聴器のフィッティング演習①（教科書 pp.178～189）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
8. 補聴器のフィッティング演習②（教科書 pp.178～189）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
9. 補聴器のフィッティング演習③（教科書 pp.178～189）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
10. 補聴器の適合評価（教科書 pp.190～191、197～198）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
11. 人工内耳の基礎原理（教科書 pp.199～229）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
12. 人工内耳のマッピング（教科書 pp.199～229）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
13. その他の人工聴覚器				復習：授業範囲の内容をまとめる		
14. 補聴援助システム（教科書 pp.229～235）				復習：授業範囲の内容をまとめる		
定 期 試 験						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	■定期試験 100%
	基準等					□その他 %
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	中村ほか（編）	「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学」第2版		医学書院		2015
参考文献	小寺一興	「補聴器のフィッティングと適用の考え方」		診断と治療社		2017
	小川郁（監修）	「ゼロから始める補聴器診療」		中外医学社		2016
履修要件等						
研究室	1 号館 5 階 第 19 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 12：10～13：00		

科目No.	SHD07-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	聴覚障害治療学Ⅰ（含演習）		担当教員	廣瀬 宜礼		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	聴覚障害		必 修	1 単位	後 期（30h）
教員の実務経験と 授業内容の関連						
授業内容の要約	聴覚障害児へ（リ）ハビリテーションと係わりについて学ぶ。聴覚言語学習の指導法、各種コミュニケーション方法を用いた言語指導、養育指導などについて講義や演習を交えながら理解を深める。					
学修目標 到達目標	1. 小児聴覚障害の評価や診断に基づく（リ）ハビリテーションについて理解できる 2. 聴覚障害児の（リ）ハビリテーション計画を立案・実施（演習）できる 3. 指導教材や器具等を作成できる					
授業形態 授業の進め方	パワーポイントによる講義で教科書と配付資料を併用する。グループでケースの演習を行う。聴覚と小児の発達と耳鼻科領域の知識を復習しておく。					
授業計画			授業時間外に必要な学修			30 分以上
1. 聴覚障害児の発達			復習を 30 分			
2. 聴覚障害児の評価			復習を 30 分			
3. 聴覚障害児の指導とコミュニケーションモード			復習を 30 分			
4. 乳児期から幼児期の指導			復習を 30 分			
5. 学童期からの指導			復習を 30 分			
6. 保護者支援（障害の受容）・母親法			復習を 30 分			
7. 言語、コミュニケーション指導（			復習を 30 分			
8. 発音指導と聴能指導・訓練計画の立案 1			復習を 30 分			
9. 訓練計画の立案 2			復習を 30 分			
10. 発音指導と聴能指導			復習を 30 分			
11. 模擬臨床指導（演習）1			復習を 30 分			
12. 模擬臨床指導（演習）2			復習を 30 分			
13. 模擬臨床指導（演習）3			復習を 30 分			
14. 臨床の記録、評価			復習を 30 分			
定期試験（期末レポート）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト 20%	□レポート 80%	□定期試験 %		□その他 %
	基準等	授業内の小テストを実施し、授業の内容についての理解度を評価する	与えられた課題を講義内容の視点と絡めて深く考察しているかどうかを評価する			
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	藤田郁代監修	「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学」第2版		医学書院		2015
参考文献	立石 恒雄	言語聴覚士のための子どもの聴覚障害訓練ガイダンス		医学書院		2015
履修要件等	「言語発達学」を履修済みであることが望ましい					
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。		

科目No.	SHD08-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次	
授業科目名	聴覚障害治療学Ⅱ（含演習）		担当教員	馬屋原 邦博			
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間	
	言語聴覚学	聴覚障害		必 修	1 単位	後 期（30h）	
教員の実務経験と授業内容の関連	障害者福祉施設で言語聴覚士として勤務した経験から、成人聴覚障害者の支援方法について授業を行う。						
授業内容の要約	成人聴覚障害者の障害状況を知り、それぞれの生活の場での困難状況に即した対策を検討し、それぞれのゴールとしての社会参加にあわせた支援方法を考える。						
学修目標 到達目標	1. 成人聴覚障害者のリハビリテーションと障害対策について理解できる 2. 高齢難聴者の支援方法について理解できる						
授業形態 授業の進め方	講義と実技学習を交えながら進める。						
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上		
1. 成人聴覚障害者のリハビリテーション（教科書 pp.282～284）			復習：授業の範囲をまとめる				
2. 成人聴覚障害者のニーズ（教科書 pp.282～284）			復習：授業の範囲をまとめる				
3. 障害対策支援：聴覚補償（補聴器①）（教科書 pp.284～289）			復習：授業の範囲をまとめる				
4. 障害対策支援：聴覚補償（補聴器②）（教科書 pp.284～289）			復習：授業の範囲をまとめる				
5. 障害対策支援：聴覚補償（補助機器・日常生活用具の活用）（教科書 pp.284～289）			復習：授業の範囲をまとめる				
6. 障害対策支援：コミュニケーション手段の拡大・代替（教科書 pp.290～282）			復習：授業の範囲をまとめる				
7. 障害対策支援：コミュニケーションストラテジー（教科書 pp.292～296）			復習：授業の範囲をまとめる				
8. 障害対策支援：家族および周囲の対応や配慮の仕方（教科書 pp.292～296）			復習：授業の範囲をまとめる				
9. 障害認識と障害受容への支援（教科書 pp.296～298）			復習：授業の範囲をまとめる				
10. 成人聴覚障害者の社会生活の支援①（教科書 pp.298～301）			復習：授業の範囲をまとめる				
11. 成人聴覚障害者の社会生活の支援②（教科書 pp.301～304）			復習：授業の範囲をまとめる				
12. 高齢難聴者の支援（教科書 pp.304～306）			復習：授業の範囲をまとめる				
13. 成人聴覚障害者の社会資源とその活用（教科書 pp.347～350）			復習：授業の範囲をまとめる				
14. 特異的な聴覚障害・重複障害（教科書 pp.310～320、pp.331～339）			復習：授業の範囲をまとめる				
定 期 試 験							
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	■定期試験 100%	□その他 %
	基準等					筆記試験により授業内容全般についての理解度を評価する。	
教科書	著者		タイトル		出版社		発行年
	中村ほか（編）		「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学」第2版		医学書院		2015

参考文献	山田弘幸	「改訂聴覚障害Ⅱ―臨床編」	健帛社	2008
	日本聴能言語士協会 講習会実行委員会	「アドバンス/コミュニケーション 障害の臨床 第7巻 聴覚障害」	協同医書	2002
	小川郁（監修）	「ゼロから始める補聴器診療」	中外医学社	2016
履修要件等				
研究室	1号館5階 第19研究室	オフィスアワー	毎週水曜日 12：10～13：00	

科目No.	SHD06-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	視覚聴覚二重障害学（含演習）		担当教員	馬屋原 邦博		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	聴覚障害		必 修	1 単位	後 期（16h）
教員の実務経験と授業内容の関連	障害者福祉施設で言語聴覚士として勤務した経験から、視覚聴覚二重障害者の障害、コミュニケーション、支援方法について授業を行う。					
授業内容の要約	視覚聴覚二重障害による特有のニーズを理解し、視覚聴覚二重障害者（児）のコミュニケーションと社会参加を支援する方法を学ぶ。					
学修目標 到達目標	1. 視覚聴覚二重障害の障害原因について理解できる 2. 視覚聴覚二重障害者のコミュニケーションを含む生活上の困難とその軽減対策が理解できる 3. 視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段について理解できる					
授業形態 授業の進め方	講義とコミュニケーション手段についての実技学習を行う。					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
1. 視覚聴覚二重障害の定義と視覚聴覚二重障害者の実態（教科書 pp.320～323）				復習：授業の内容をまとめる		
2. 視覚について（視力障害、視野障害など）				復習：授業の内容をまとめる		
3. 視覚聴覚二重障害者の困難（教科書 pp.323～326）				復習：授業の内容をまとめる		
4. 視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段および実習①（教科書 pp.326～329）				復習：授業の内容をまとめ、実技の復習をする		
5. 視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段および実習②（教科書 pp.326～329）				復習：授業の内容をまとめ、実技の復習をする		
6. 視覚聴覚二重障害者の社会生活（移動介助体験含む）				復習：授業の内容をまとめる		
7. 視覚聴覚二重障害児（教科書 pp.329～331）				復習：授業の内容をまとめる		
定 期 試 験						
8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 100%		□その他 %
	基準等			筆記試験により授業内容全般についての理解度を評価する。		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	中村ほか（編）	「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学」第2版		医学書院		2015
参考文献	全国盲ろう者協会	「盲ろう者への通訳・介助」		読書工房		2008
	東京盲ろう者友の会	「指点字ガイドブック」		読書工房		2012
履修要件等						
研究室	1 号館 5 階 第 19 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 12：10～13：00		

科目No.	SCP07-3R		授業形態	演習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床実習指導Ⅲ		担当教員	高橋 泰子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	臨床実習		必 修	1 単位	前 期 (30h)
教員の実務経験と 授業内容の関連	言語聴覚士として臨床現場にて評価や訓練を行ってきた。その経験を活かして臨床現場に行くまでの基本的な知識や技能を解説する。					
授業内容の要約	臨床評価実習で必要となる基礎的な知識・技術が習得できる講義・演習を行う 専門基礎分野についてグループで学習する 言語聴覚療法に関する評価方法を演習しながら習得する					
学修目標 到達目標	1. 講義、情報検索、討論、ロールプレイ、演習、必要書類作成等を行う 2. 各種情報・検査結果を適切に解析・統合し、言語聴覚障害・摂食嚥下障害の病態、タイプ、重症度、訓練の必要性を判断し、訓練計画の立案までが理解できる 3. 臨床評価実習に必要な基礎的な知識・技術を修得する 4. 社会人・言語聴覚士としての基本的態度、実習・職務に対する意欲を持つ 5. 症例報告書の作成までの経緯が理解できる					
授業形態 授業の進め方	学生相互での講義、グループ演習を行う プレゼンを行うためにグループで協力して準備を進めること					
授業計画			授業時間外に必要な学修		30 分以上	
1. 臨床評価実習の意義、目的、目標、期間、内容						
2. 実習に際する注意事項確認			医療従事者としての心得を復習			
3. 実習に際する注意事項確認			個人情報保護法、災害時の対応等の復習			
4. スポーツ活動（体育祭）を通じた学生間連携・チームワーク						
5. 国家試験出題基準の小項目に記載されている用語についての学習			専門用語の解説ノートの作成			
6. 国家試験出題基準の小項目に記載されている用語についての学習			専門用語の解説ノートの作成			
7. 情報収集演習、症例ビデオの解析、検査演習、グループ演習			考察を深め、レポートを作成する			
8. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
9. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
10. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
11. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
12. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
13. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
14. 検査演習			臨床実習に関連する検査の練習			
定期試験（期末レポート）						
15. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）			訓練プログラムの立案			
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	■レポート 50 %	□定期試験 %	■その他 50 %	
	基準等		グループ発表で用いる資料を評価する		演習態度を評価する	
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
		※「大阪河崎リハビリテーション大学 言語聴覚学専攻：実習の手引き」				
参考文献	平野哲雄他 編著	「言語聴覚療法 臨床マニュアル第3版」		協同医書出版社		2014
	廣瀬肇 監修	「言語聴覚士テキスト 第2版」		医歯薬出版		2011
履修要件等	「臨床基礎実習」の単位取得済みであること。					

研究室	1号館5階 第17研究室	オフィスアワー	毎週水曜日 10:40～12:10
-----	--------------	---------	-------------------

科目No.	SCP08-3R		授業形態	実習	開講年次	3 年次
授業科目名	臨床評価実習		担当教員	高橋 泰子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	臨床実習		必 修	4 単位	後 期 (160h) 4 週間
教員の実務経験と 授業内容の関連	5 年以上の臨床経験がある言語聴覚士が臨床現場において 4 週間の指導を行う。					
授業内容の要約	医療・介護・福祉・教育機関において、言語聴覚・摂食嚥下障害のある方の実態と言語聴覚士の業務内容を理解し、対象児・者のニーズ把握とその解決に必要な支援の方法を学ぶ					
学修目標 到達目標	1. 職務上必要な情報の収集・管理方法を修得する 2. 対象児・者について各情報や観察結果から、適切な検査を選択し実習指導者の下に施行できる 3. 各種情報・検査結果を適切に解析・統合し、言語聴覚障害・摂食嚥下障害の病態、タイプ、重症度、訓練の必要性を判断し、訓練計画の概要を立案できる 4. 他の言語聴覚士および医師をはじめとする関連職種に対して報告書を作成できる					
授業形態 授業の進め方	■実習日誌は、実習中毎日作成・提出し実習指導者の校閲・指導を受ける。実習終了時に一括して大学へ提出する ■実習終了時は症例・実習報告レポート等を作成し、指導言語聴覚士および大学に提出する					
授業計画				授業時間外に必要な学修		30 分以上
【臨床評価実習】 ・医療・介護・福祉・教育機関において、実習指導者の下に観察・記録・検査・解析・統合を行い、言語聴覚障害・摂食嚥下障害の病態、タイプ、重症度、訓練の必要性を判断する ・短期・長期の訓練目標を設定し、訓練計画の概要を立案する ・言語聴覚士・関連職種に対して報告書を作成し、口頭でも説明する 【臨床評価実習報告会】 ・実習内容の記録、症例報告、目標に対する結果、考察、今後の課題等をレポートにまとめ、視聴覚資料を作成し、報告会で発表する ・相互の実習体験を共有し、臨床総合実習の基盤とする				実習前：臨床現場で必要なものを準備する 実習中：観察した症例の記録、不明な点は調べる 実習後：プレゼンテーションの準備		
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	■レポート	20 %	□定期試験 %
	基準等			症例報告書 実習中の日誌 報告会用のレジュメ		■その他 80%
教科書	著者		タイトル		出版社	発行年
			※「大阪河崎リハビリテーション大学 言語聴覚学専攻：実習の手引き」			
参考文献	平野哲雄他編著		「言語聴覚療法 臨床マニュアル 第3版」		協同医書出版	2014
	廣瀬肇 監修		「言語聴覚士テキスト 第2版」		医歯薬出版	2011
履修要件等	実習要件 2) (履修の手引き参照) を満たさなければ履修できない					
研究室	1 号館 5 階 第 17 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 10:40～12:10		